
戦いの果てに辿り着いたのはリリカルな世界

オールドタイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦いの果てに辿り着いたのはリリカルな世界

【Nコード】

N4397L

【作者名】

オールドタイプ

【あらすじ】

刹那との戦いに敗れたグラハム（ryミスター・ブシドー）が辿り着いたのはリリカルな魔法世界！？
生きる目標を失ったブシドーが新たな新天地で見つける決意とは
そして歪んでしまったブシドーは変れるのか？

涅槃

青と白色の巨人と漆黒の巨人が交差しお互いの全てを出し合い激突する

何度も何度も巨人がぶつかり合うその姿は第三者が見たら美しいとすら思うだろう

「隙有りい！！」

漆黒の巨人が日本刀のような刃を青と白色の巨人に振り下ろす

「切捨てつ御免っ！！」

しかし漆黒の巨人の刃は青と白色の巨人に受け止められる

「何い！？白刃取りだとっ！！？」

青と白色の巨人は受け止めた刃を叩き折ると、腰から二本の桃色の刃を漆黒の巨人の両肩に突き刺す

「ぐわっ！」

漆黒の巨人のいたる所から火花が散り、頭の鎧兜を彷彿させる頭が吹き飛び中からオレンジ色のフェイスカバーが現れた

男は目の前で自分に刃を向ける巨人を睨み、立ち上がる

「私を切り裂き、その手に勝利を掴んで見せる！」

拳を握り締め、青と白色の巨人を睨み続けた、しばらく目の前の巨人は刃を向けたまま動かなかったが
武器を収め立ち去っていった・・・

「何故だ・・・何故止めを刺さん・・・」

男は暫く漆黒の巨人のコクピットで沈黙していたが、やがて小刀を抜き

「武士道とは・・・死ぬ事と見つけたり・・・」

「武士道とは・・・」

しかし男の周りに光が漂い始め、やがて光は男を包み、この世界からその男は消えていた

運命の出会い

グラハム「…ここ、は？」

グラハムが目を覚ますとそこは木々が生い茂る大地だった、太陽が照りつけ、風が吹きグラハムの金髪を揺らした

グラハム「馬鹿な…！？私は確かに宇宙にいた筈…そこで少年と…」

そうグラハムは先程まで己の宿命の相手と戦っていたのだそれが何故こんな場所にいるのか流石の彼でも状況が飲み込めないでいた

グラハム「それにこの服装…私はパイロットスーツを着ていた筈だが…」

今のグラハムは日本風の濃い緑色の羽織を身につけ顔には武将がつけていそうな仮面をつけている彼の事を知らない人物が見たら間違いなく変人と思うであろう格好だった

グラハム「…考えていても仕方ない、か…取り敢えず探索してみる
としよう地球ならどこかにアロウズの基地がある筈だ…これからの事を考えるのはそこからだ」

そう言うところからグラハムは歩き出した、そう彼は誰よりも我慢強く落ち着きのない男なのだ

グラハム「しかし、見た所記憶にない土地だ、せめて私の機体させあれば情報を得られるのだが…」

彼の愛機スサノオ、盟友の作りしグラハムの剣、今はいない友の思いを背負ったグラハムの分身とも言える、しかし戦いの果てに機体は大破、さらに見失ったとくれば流石のグラハムもこれを作ってくれた友に頭が上がらない

グラハム「始末書ものだな、これは…っ！殺気！！？」

グラハムが殺気を感じ即座にその場から飛び退くと自分がいた場所が消し炭になっていた

グラハム「これは…新型のオートマトンか？…しかし救援に来てくれた訳ではなさそうだ…」

カプセルに似た円錐型の機械がグラハムの周りに数十機囲んで今まさに攻撃を再開しようとしていた
咄嗟に彼は攻撃を交わし岩の後ろに回り、身を隠した

グラハム「ふっ、私の感はよくあたるのだよ…だが当たっていて欲しくはなかったがな…」

グラハムは苦笑した、どうやらこの機体は私を殺すつもりらしい、先程まで自害を考えていた彼だが
殺されるつもりは毛頭ない、だが考えているうちにも機体はグラハムの隠れている岩に近づいてくる

グラハム「万事休す、絶体絶命、か…せめて武器があれば…」

？『武器ならありますよ、ミスター・ブシドー』

突然の声にグラハムは辺りを見回した

グラハム「誰だ！？それに武器とは…？」

？『貴方の服の裏です、ミスター・ブシドー』

グラハムは服の裏に手を入れ声の主を掴んで取り出した

グラハム「これは…！？ユニオンの国旗？」

そこにはかつてグラハムがいた軍の国旗の形をした黒いプレートの
ような物があつた、それは光ながら音声を発していた

？『ミスター・ブシドー、貴方が望むなら私は貴方の剣、貴方の鎧
となります』

突然の事に少々ロマンチストであつたグラハムも困惑の色を隠せず
にいた

グラハム「貴様は一体…？それに剣とは…？」

？『そんな事よりも今はこの状況を切り抜ける方が先です、ですが
これだけは言っておきます私は貴方の味方です、何時如何なる時も
…』

グラハム「…ふっ、どうやら考えている時間はもらえない様だな…」

グラハムの周りに円錐型の機体が数十機展開し、今まさに攻撃をす
ると言う状況だった

グラハム「分かった、貴様の事を信じよう、で、どうすればいい？」

？『セットアップ、と言って下さいミスター・ブシドー』

グラハム「了解した、セットアップ！」

その瞬間、グラハムに敵の攻撃が何発も放たれた

（視点変更）

なのはとフェイトは六課で確認された謎の高エネルギー反応の調査の為に目標ポイントを目指していた

フェイト「なのは、もうすぐ、目標地点だよ」

なのは「うん、何があるか分からないから気を引き締めていこう、」

フェイト「ガジェットの反応もあるし、ロストログアが関係してるかもしれない」

なのは「そうだね…危険な任務になるかも…！！？フェイトちゃん！」

フェイト「こっちでも確認出来た、ものすごいスピードでガジェットの反応が消えてる！」

なのは「急ごう！フェイトちゃん」

なのはとフェイトはスピードを上げるだがこうしている間にもガジ

エットの反応は消えていき、ついに

フエイト「ガジェットの反応が消えた…」

なのは「どうなってるの…！っ…目標ポイントに何かいる！」

そこには赤く光る日本刀のような物を持ちクワガタのツノを生やした赤い鬼のような人？ロボット？が四つの鋭い眼光でなのはとフエイトを睨んでいた

〈視点変更〉

グラハムは自分から数メートル離れて着地した二人の少女を見て驚いた、何せ人が推進力も無しに飛行していたのだから驚かないはずもない、すると黒い衣装を纏った金髪の少女が一步前に出て声を発した

フエイト「私達は時空管理局の者です」

なのは「高エネルギー反応の調査の為に来たんですが…あの、このガジェットは貴方が倒したんですか？」

グラハム「時空、管理局…？何だそれは？私はそんなものは知らない、」

なのは「え？…知らないって…？」

なのはは驚いた、この赤い鬼みたいなロボットが普通に喋ったのと

時空管理局を知らない人がいるとはまず思えなかったからだ

グラハム「そんな事よりも、ここは地球のなんという場所だ？私は一刻も早く軍と連絡を取らなければならんだ」

グラハムはサキガケのロングGNサーベルを二人に向け威圧的に言葉を発した、ただでさえ状況が飲み込めないのだ、ちょっとした油断が命取りに繋がる

フェイト「なのは、このロボット地球って…」

なのは「うん、このロボット次元漂流者かもしれない…」

グラハム「何を二人で話している！、それに私はロボットではない、私の名はグラハム・エーカー、軍人だ」

なのは「えっと、私は高町なのはです」

フェイト「フェイト・テストロッサ・ハラウンです」

なのは「グラハムさん、今回の件でお話を聞きたいので私達に着いて来てもらえないでしょうか？…」

グラハム「…」

この静寂を崩したのはグラハムのデバイスだった

サキガケ『ブシドー、ここは彼女達に従った方がよさそうです、情報を得る為にもここで騒ぎを起こしたら後々問題が起こりかねません』

グラハムのデバイス、サキガケ、この名前はグラハムがガジェットと戦う時に自分のバリアジャケットの姿を見て命名したものだ

グラハム「私としては不本意だが…仕方あるまい、そうしなければ
ならないとみた、従おう」

グラハムはバリアジャケットを解除、その直後その姿を見たのは
達は若干引いたという

鬼神

グラハム「…魔法、か、信じられん話だが、信じるしかないようだな…」

なのはとフェイトはグラハムを参考人として機動六課につれていく為にヘリを要請、ヴァイスのヘリが六課に着くまでの間、グラハムはこの世界についてなのは達に色々聞いていた
最初は信じられなかったがバインドやら簡易的な魔法を見せられてはグラハムも納得するしかない

グラハム「サキガケ、貴様はどう見る？」

サキガケ「彼女達は嘘は言っていないと思われます、現に私はこの世界で言うデバイスとほとんど同じらしいですから、若干高性能らしいですが」

グラハム「ふむ…では元の世界には帰れると思うか？」

サキガケ「現状ではデータ不足が否めません、とにかく情報収集を第一に考えたほうがよさそうです彼女達の所属している時空管理局とやらは大きな組織らしいので、そこで情報を得たほうが得策かと」

グラハム「…しかし、これは傑作だな、戦いに敗れた私がこんな世界に来るとは…」

しかしグラハムはそこまで落胆していなかった元の世界に戻っても彼には何もない親友が一人いるだけだ、宿命の相手にも敗れてしまった今、彼の心には何も残ってはいなかった

フェイト「グラハムさん、申し訳ないのですがそのデバイスは一時的に私達が管理させていただきます」

なのは「すみません、ガジェットを倒してもらったのにこんな扱いをしてしまって…」

グラハムは最初こそ威圧的だったが、彼女達の話素直に、落ち着きを持って聞いていた、誰だっていきなり知らない場所に飛ばされたら周りが敵に見えてしまうだろう、しかも戦闘の直後だ、私達を疑うのも頷ける

グラハム「それで、私の身柄はどうなるのだ？」

フェイト「それは機動六課の部隊長の判断によりますが、グラハムさんの身の安全は保障します」

グラハム「その機動六課の目的は？」

なのは「オーパーツ、過去の文明の危険な遺産、通称ロストロギアって呼んでるんだけど、その保護が目的なの」

グラハム「オーバーテクノロジー…ふっ、ガンダムを初めて見た時の事を思い出したよ…」

フェイト「え?…」

グラハム「いや、独り言だ、無視してくれて結構」

その時ヘリ内からけたたましいアラート音が

なのは「ヴァイス！どうしたの！？」

ヴァイス「ガジェット・ドローンが接近中！ヘリの前に広く展開しています！」

フェイト「なのは！」

なのは「うん！私とフェイトちゃんて迎撃に出てくるからヴァイスはグラハムさんをお願い！」

グラハム「敵襲か？」

なのは「うん、だからグラハムさんはここにいて下さい！いくよフェイトちゃん！」

そう言うと二人はバリアジャケットを展開し大空に飛び出していった、グラハムはその姿が見えなくなるまで見つめていた

（視点変更）

なのは「シューート！」

フェイト「ファイヤ！」

二人はガジェットドローン相手に背を合わせながら戦っていたがいささか数が多い

フェイト「なんでこんなにも数が!？」

なのは「それに目標はあくまでもへりみただし…まさかグラハムさんを!？」

フェイト「うん、その可能性が高い…っ!しまった!」

会話をしていた為後方が不注意になってしまった所を攻撃されてしまった防御は出来たが陣形を崩されてしまった戦場においてこれは致命的だ、

なのは「フェイトちゃん!アクセルシューター!行つて!」

なのはから放たれたアクセルシューターは確実に敵を取られ撃破していく、しかし数でそれを補うガジェットは数機へりに向かう

なのは「しまった!ダメエー!!」

なのはとフェイトがへりに向かおうとするがガジェットの弾幕があつて思うように近づけない、そしてガジェットの攻撃がへりに当たろうとしたその時、何者かの防御により防がれる

フェイト「あれは!？」

なのは「グラハム…さん!？」

爆煙の中から現れたのは赤い粒子を撒き散らし、左手に赤い魔力の刃を持った四つ目の鬼がいた、そうそれは先程見たグラハムのバリアジャケットだった

グラハム「…御邪魔だったかな?…」

グラハムはそう言うのと猛スピードでガジェットに迫り一太刀で真つ二つにした、その光景を見ていた二人は

フェイト「速い…!」

なのは「それに、綺麗な戦い方…」

二人も幾多の修羅場を潜り抜けている、だからこそ分かるグラハムのその無駄のない戦い方が、攻撃を受けてもスピードを緩めず、交わしガジェットに肉薄、そして切り倒す、まさにそれは鬼、鬼神の如き姿だった

グラハム「…とんだ茶番だ…このような温い戦い…だが…助太刀いたす!」

グラハムの参戦のお陰でなのは達はガジェットを全機撃破し無事にヘリに帰還する事が出来た

なのは「…あのグラハムさん先程はありがとうございました!」

なのはは頭を下げる

グラハム「…頭を上げてくれ、先程のは私の独断によるものだ、君達の恩を売る為にやったのではないよ」

フェイト「ですが助けてもらったのは事実です、本当にありがとうございました」

グラハム「…ではその言葉、素直に受け取っておこう」

グラハムは腕を組みながら本当に気にしてない様子で言った

フェイト「…助けて頂いたのに心苦しいのですが次元漂流者がデバイスを使用するのは禁じられていますので預からせてもらってよろしいでしょうか?…」

フェイトが心苦しいそんな表情で言った

グラハム「分かった、だが最後にデバイスに聞きたい事があるので話していいだろうか?」

グラハムの言葉になのは達は頷いて承諾した、するとグラハムはデバイスに念話で話し掛けた

グラハム『サキガケ、バリアジャケットはこのサキガケのみなのか?』

サキガケ「いえ、ブシドーの世界の機体データはあらかた揃っています」

グラハム『ではスサノオは使用可能か?』

サキガケ『…申し訳ありません、ブシドー現在はサキガケしか使用出来ません、しかしプログラム構築を許可していただければいずれ使用可能になりますが、どうされますか?因みにスサノオよりマ斯拉オの方がプログラムがシンプルですのでマ斯拉オの構築を推奨します』

グラハム『ふむ…ではそうしてくれ、サキガケでも今の所問題はないが…』

サキガケ『了解しました、ではマスラオの構築を最優先とします』

グラハム『ああ、頼む』

念話が終了しグラハムはユニオンの国旗の形をしたデバイスをフェイトにわたした

フェイト『すいません…』

グラハム『いや、構わんよ、私はこの世界ではイレギュラー…鼻つまみ者だからな…』

グラハムは皮肉を自分に対して言う、はのは達は苦笑した

ヴァイス『着きましたよ、機動六課に』

ヴァイスが言うと目の前に建物が見える、グラハムは腕を組みながら、機動六課…と呟いた

機動六課

グラハムはなのはとフェイトに連れられ機動六課内を歩いていたその間にもなのはやフェイトから話を掛けられていたが、グラハムはああ…、うむ、としか返さなかった

なのは『緊張してるのかな？グラハムさん』

なのはがフェイトに念話を送る

フェイト『かもしれない、いきなり魔法世界って言われてしかもこれから自分の事を左右する人に会いに行くんだもん、緊張しない方が無理だよ』

なのは『ははは、そうだよね…』

そうこうしている内になのは達はある部屋の前で止まった、グラハムはここが機動六課の部隊長の部屋と認識した

なのは「ここが私達の部隊長の部屋だよ、でも入る前に…」

なのはが何か言いたそうな表情でグラハムを見る、後ろのフェイトも似たような表情をしていた

グラハム「…何か、問題でも？」

グラハムはなのはの目を見ながら聞いた、なのはは意を決したように言葉を発した

なのは「あの、グラハムさん…その仮面、外してくれないかな?…」

そうグラハムはここに来るまでずっと愛用の仮面を身につけたままだったのだ、お陰で六課内の人から怪訝な眼差しを受けていた、だがグラハムはまったく意に介してなかった元々グラハムはアロウズ内でも常にこの姿だったのだが注意するものはいなかったのだ、それは彼がライセンスー持ちと言うのが関係していた、通常軍では上官の命令は絶対である、しかしこのライセンスーを所持している人間は独自行動が可能という軍では破格のものだった故に彼に仮面の事を言う人物はいなかった

あまつさえその姿を見て彼をミスター・ブシドーと言う輩までいた当の本人は迷惑千万と言っていたが…

グラハム「…断固辞退する…」

それを聞いてなのはとフェイトは驚いた

グラハム「機動六課では仮面の着用は認められないと言う規則がある訳でもあるまい?」

確かに機動六課にそんな規則はない、しかし常識的に考えて初対面しかも自分の運命を握っている人物に会うのに仮面を着用したままというのはどうなのであるうかとなのは達は思った、なのはとフェイトはああ…この人は少々強情な所があるんだな…と苦笑するしかなかった

なのは「ははは…、わかったよ…じゃあ入ろうか」

なのはがドアをノックし開けた、なのは、グラハム、フェイトと言う順に入った

中には三人の人物がいた、左側に背の低い目つきの鋭い少女、右側に背の高いピンク色の髪をしたスタイルのいい女性、そして中央にイスに腰を掛けた茶髪の女の子がいた、グラハムは部隊長がこんな若い女性である事に多少驚いたが、納得もした
外見は普通の女の子だが目を見た瞬間に分かった、戦った事のある目だそれも修羅場を…

（視点変更）

シグナムとヴィータはなのは達が連れてきた人物を見た瞬間身構えた、それは本能だのかもしれない、まずその男の身なりだ服装は和風、服の上からなので詳しくは分からないが鍛えてあるだろうその身体、そしてその仮面である、どう考えても変質者である、しかし一番はその眼だ…それは戦って戦って戦い続けた者の眼、鋭い眼光…隙がない…シグナムは思った…だが同時に戦ってみたいとも思った、身体の奥底から強者と戦ってみたいというバトルマニアの悲しい性である…

ヴィータはそんなシグナムを見て多少呆れていたが、男に対して身構えていた、コイツ…なにもんだ…

はやて「ようこそ来てくれました、グラハム・エーカーさん、私は機動六課部隊長をやっている八神はやてといいます、そしてこの二人が」

シグナム「シグナムだ」

ヴィータ「ヴィータ……」

はやて「もう、二人とも失礼や、グラハムさんは成り行き上へりを守ってくれたんよ？」

なのはとフェイトは事前に事の全貌をはやてに話していた、そのお陰でスムーズに話事が出来た

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんを守ってくれたみたいやし、本当にありがとうございました」

頭を下げるはやて、その間にもグラハムは身動きせずはやて達を見ていた、はやてが頭を上げるのを見るとグラハムは口を開いた

グラハム「単刀直入に聞く、私の身柄とデバイスはどうなる？」

はやては一瞬たじろぐが、あくまでも落ち着きを持って答えた

はやて「えっとな、まず謎の高エネルギー反応とグラハムさんの関連性はまだ分からないので一先ず保留で、この事が分かるまでグラハムさんの身柄は機動六課で保護という連絡を受けました、でガジェット撃破及び成り行き上とは言え二人を守ってくれた事で拘束は無しと言う事です、デバイスに関しては正式に時空管理局本部から通達があるまでこちらで預かるという事です」

グラハムは目を瞑り黙ってはやての言葉を聴いていた、そして話が終えるとグラハムは静かに目を開け

グラハム「つまり私は、籠の中の鳥、と言う訳だな」

はやて「申し訳ないですけど、その通りですわ…でも六課内は自由
に行動しても構わんそうや、多分なのはちゃんとフェイトちゃんを
守ってくれた事で敵ではないと本部が判断したんだと思うんよ」

グラハム「そうか…では話は終わりかな？ 終わりなら私は休ませて
もう」

はやて「ああ…そやな！ 今日色々あってグラハムさんも疲れてい
るだろうしゆっくり休んでや！ フェイトちゃん、部屋に案内してく
れるか？」

フェイト「うん、わかったよ」

そういうとフェイトとグラハムは部屋を後にした

〈視点変更〉

はやて「はあ…なんか話しづらい人やったなあ…」

なのは「でも私やフェイトちゃん、それにへりを守ってくれたから
悪い人じゃないと思うよ？」

はやて「そうなんやろうけど、私は苦手なタイプや…んん？ シグ
ナムにヴィータ、さっきから黙ってどうしたんや？」

ヴィータ「はやて、あの男、ただもんじゃねえぞ」

シグナム「ああ、私もそう思う、先程の戦闘データを見た所あいつ

は被弾はおろか、かすりもしていない、しかもガジェットを一撃で破壊している」

そこにはグラハムがガジェットと戦っていた時の映像が写し出せれていた

機動六課（後書き）

初めての小説ですのでお手柔らかにお願いします
誤字脱字があった場合報告してくれたら嬉しいです
後こうしたほうがグラムぽくない？とかこのキャラ性格違わない
？とかあったら指摘お願いします

協力

朝の日差しで男、グラハム・エーカーは目を覚ました、昨日はやて達と別れた後、フェイトに案内された部屋で寝ていたのだ、部屋に入る前にフェイトにあんまりそういう態度を取っていると疑われちゃうよ？と忠告を受けていたがグラハムは…善処する…と答えた、フェイトは明日の朝迎えが来ると思うからそれまでに起きていて欲しいと言われた、後簡易的な検査もするとも告げられた

グラハムはベットから起きると顔を洗いに洗面所へ向かった、顔を洗い鏡を見ると顔の右側に大きな痛い傷が目に移ったがグラハムは気にせず顔を拭くと昨日渡された機動六課の服装に袖を通した、グラハムの着ていた服は昨日フェイトが洗濯してくれると言うので渡してしまい今はない、そしてグラハムはイスに腰掛けると思いに耽った、これからの事、グラハム・エーカーという男は自分が決めた道は絶対に押し通す男である、だからこそあの少年との戦いにだけ執着した…フラッグファイターとしての誇り、失ってしまった恩師と友の仇、そしてあの少年とガンダムへの勝利この為だけにグラハムは生きてきた、だが今はそれもかなわない、なにせこの世界に少年とガンダムはいないのだから…グラハムは生きる目標を失ってしまった…自分は…私は…どうすればいいのだ…

グラハム「ダリル…ハワード…カタギリ…私はどうすればいいのだっ…」

その時グラハムの部屋を誰かがノックした

なのは「グラハムさん、高町なのはです、起きてますか？」

声の主は昨日いた白いバリアジャケットを纏った少女だ

グラハム「ああ、起きている、今行く、待っていてくれ」

そう言うところからグラハムはポケットから仮面を取り出し顔につけた

「視点変更」

なのはが待っていると中からは六課の茶色の服を身に纏ったグラハムが現れた、高い身長に鍛えられたであろう身体どう考えてもイケメンの部類に入るであろうが顔につけた仮面のせいで変質者にしか見えなかった

なのは「にやはは…またつけたんですか？仮面…」

正直なのははグラハムの素顔を見たいと思った、だがグラハムは昨日から今日まで一度たりとも仮面を外さなかった、後グラハムのオラである、簡単に外すようには見えなかった

グラハム「気にするな、で検査とやらにいくのだろうか？」

気にするなって…どう考えても気にするよお…；なのはは心の中でグラハムにツツコミを入れた

なのは「はい、グラハムさんの身体に異常がないか調べるのと魔力測定ですね

グラハム「魔力測定？」

なのは「はい、グラハムさんの魔力を検査し、それを数字にしてランクを測るんです」

グラハム「…興が乗らんな…」

なのは「すいません、でも規則ですから…」

グラハム「分かっている、しかし私に魔法が使えるとは思えんが…」

確かにグラハムはこの世界に来て魔法という魔法を使った事がない、あるとすればデバイスとの念話位だ

なのは「まあそれはそのうち使えるようになりますよ、じゃあそろそ行きましょうか？」

検査を済ませたグラハムは食堂に案内されたそこには昨日見たはやてやシグナム、ヴィータ、フェイトがいたがそれ以外にも何人かが同じテーブルに座っていた

はやて「なのはちゃん、それにグラハムさん、おはようさん！」

フェイト「おはよう、なのは、グラハムさん」

なのは「おはよう、皆」

グラハムはその様子を見ていたが空いている席に腰を掛けた、何人かの人間が自分を見ているのに気がついたピンク色と赤色の髪の子供は怯えた様子で、青い髪の少女は興味津々の様子で、そしてツインテールの少女は怪訝な眼差しで…だがグラハムは気にせず眼を瞑

った

（視点変更）

？『ねえ！ティア！あの人誰だろうね！？』

？『知らないわよ！…仮面なんかつけて怪しさ満点ね』

？『エリオ君…怖いですう…』

？『うん…僕も怖い…』

はやて「あ！皆にも紹介するな！こちらはグラハム・エーカーさん、昨日なのはちゃんとフェイトちゃんを助けてくれたんや！それでしばらく機動六課にいてもらう事になるから皆もなかような？では自己紹介よろしゅう！」

ティアナ「ティアナ・ランスターです！」

スバル「スバル・ナカジマです！」

キャロ「キャロ・ル・ルシエです…」

エリオ「エリオ・モンデュアルです！…」

グラハム「私の名前はグラハム「ちょっと待ってください！」…なにつ！？」

グラハムが声の方向に目を向けるとそこには水色の髪をした小人？妖精？のような人物がいた

その小人ははやての近くに行き自己紹介を始めた

リン「はやてちゃんのデバイスのリン・フォースツヴァイです！よろしく願いするですう！」

それを見たグラハムも驚愕を隠せない…成る程…魔法とは何でもありなのだな…

グラハム「それではあらためて…グラハム・エーカーだ機動六課に保護してもらった身だ、よろしく頼む」

こうして自己紹介を終えた、するとはやてが

はやて「実はグラハムさんの方針が本部の方で決まったようなんので話させてもらいますわ」

グラハム「ほう…意外に早い対応だったな…もう少し掛かると思っていたが…」

はやて「ははは、多分グラハムさんの事が例にない事例だったので最優先にされたんやと思います」

グラハム「そうか…で、内容は？」

その内容に皆が耳を傾ける…

はやて「えゝ、コホンッ！グラハム・エーカーさん貴方のこの度の

活躍により隊員の身を守ってくれた事に感謝します、そしてガジェットの撃破、素晴らしい技量と判断力そして高性能のデバイスの所持、つきましては時空管理局は貴方の力を貸していただきたい所存であります、判断と今後の処遇については機動六課部隊長八神はやての判断に任せる。との事や」

フェイト「すごいね…」

なのは「うん、対応の早さもだけど」

シグナム「確かにグラハムは他の部署には任せられんな、うちが適任だろう」

ヴィータ「…まあそうだろうな、」

はやて「どうやるか？グラハムさん、出来れば貴方の力を貸していただきたいんやが…」

皆はグラハムを見つめる、グラハムは腕を組み静かに聴いていたが、やがて目を開き

グラハム「成る程、私に力がある以上、その力を有効的に使いたいがイレギュラーでもある、だから私が裏切った時に押さえ込めるだけの實力を持ったこの六課に任せると言う訳か…」

はやて「そ、そういう訳じゃ…！いや…その通りです、グラハムさん！、私は貴方の力を六課の為に使わせてもらいます！」

なのは「はやてちゃん！」

フェイト「はやて！それは」

はやて「ごめんなあグラハムさん…確かにグラハムさんの言う通りや、でも私達はグラハムさんの事を信じる！だから力を貸してや！」

一同が黙って聞いていた

グラハム「…いい目をしている…」

はやて「え！？」

グラハム「いいだろう、グラハム・エーカー機動六課に協力する事を宣誓しよう」

はやて「ほんまか！？ありがとう！グラハムさん！」

グラハム「正し、私のデバイスを返して貰わない事には何も出来ん」

はやて「あ！忘れとった！はい、グラハムさんのデバイス、ありがとうなあ、」

グラハム「このデバイスについて何か分かったのか？」

はやて「ううん、高性能のインテリジェンスデバイスって事以外は何も…後はプロテクトがかけられていて分からずじまいや…」

グラハム「そうか、でこの後の事だが…私は何をすればいい？」

なのは「それだったらこの後訓練場で訓練をするんだけどグラハムさんもどうかな？グラハムさん魔法の事はほとんど知らないでしょ

う？」

フェイト「うん、その方がいいね、これから一緒に戦うんだし」

グラハム「なら、そうする必要があるとみた、…後私に敬語は必要ない、呼び捨てで結構」

なのは「ならそうするね、よろしくグラハム」

フェイト「よろしく」

はやて「よろしゅうなあ！グラハム」

シグナム「話が纏まった所でグラハム、話がある」

グラハム「…何かな？」

シグナム「私と勝負して欲しい」

一同「ええ〜！〜！！？」

はやて「ちょ、ちょっとどないしたんや！シグナムいきなり勝負だなんて！」

なのは「そうだよ！グラハムは魔法戦なんてしたことないんだよ？」

シグナム「だからこそ、戦場で背を預ける事が出来るか否か判断する事が必要だ」

ヴィータ「確かにな」

フェイト「どうする？ グラハム…」

グラハム「その果し合い、受けてたっ」

シグナム「ふっ…感謝するぞ、では先に訓練場で待っている」

グラハムは静かにだが力強くシグナムの背を見つめていた

模擬戦（前書き）

シグナムとの果し合いを受けたグラハム
今まさに武士VS騎士の誇りを賭けた戦いが始まろうとしていた…

模擬戦

シグナム「勝負を受けてくれた事、改めて感謝する」

グラハム「私も、微温湯にいて少々物足りなかった所だ」

お互い訓練場にて眼を見ながら話している、言葉では穏やかだが二人とも眼が本気だ

〈視点変更〉

スバル「なのはさん、グラハムさん本当に大丈夫なんですか？相手はあのシグナムさんですよ！？」

なのは「うん、でもグラハムもかなり強いと思うよ…（あの時の戦い方本当に凄かったしね…）」

現在なのは達は訓練場にてグラハムとシグナムの戦いを観戦する為に居た、フェイトとはやては用があり今は居ないが後で結果を教えて欲しいと言っていた

？「でも楽しみですね！あのデバイスはどんな性能なのでしょう」

髪の長い眼鏡をかけた女性は楽しそうに言った名前はシャリオ・フイニーノ、デバイス技師でメカニックである、サキガケのデバイスにプロテクトが掛けられていたのでせめてこの目でみようと思ったのである

ティアナ「あ、それ私も気になる！なのはさん、どんなデバイスなんでしょうか？」

なのは「うゝん、一言で言つと、赤鬼？」

エリオ・キャロ「あ、赤鬼！！？」

なのは「うん、私も初めて見た時はびっくりしちゃったなあゝ、にやはは」

スバル「笑えませんよゝ…」

ティアナ「じゃあ、あの人の基礎能力はどうなんですか？」

ヴィータ「それはあたしも気になるな」

なのは「あはは、じゃあ今朝検査したからもうデータがあるから見てみようか」

グラハム・エーカー

- 基礎能力 -

リンカーコア B

魔力資質 B -

身体能力 S +

空間把握 S S +

状況判断 S S S -

魔力生成力 B -

一同はグラハムのデータを見て驚いた、確かに魔力などは並みのラ
ンクだが、戦闘に必要な能力はズバ抜けて高かったからだ

ヴィータ「結構やるな、あいつ」

ティアナ「嘘…!？」

エリオ「凄い…」

キャロ「??」

スバル「これって…」

なのは「やっぱり、グラハムは只者じゃないね…」

〈視点変更〉

シグナム「準備はいいか？」

グラハム「いつでも、構わん」

シグナム「ふっ…レヴァンティン！」

レヴァンティン「はい、マスター」

するとシグナムの姿が騎士甲冑になった、手にはレヴァンティンが握られている

グラハム「…一つ聞いてもらえるか？」

シグナム「なんだ？」

グラハム「全力できてもらおう」

シグナム「無論、そのつもりだ」

シグナムは静かに笑っていた間違いなくこの男は強い、強い者と戦える、これが笑えずにいられるだろうかレヴァンティンを持つ手に力を入れる…

グラハム「ならば、サキガケ！」

サキガケ<了解、ミスター・ブシドー>

グラハムもまた全身が光り、サキガケに変わる、その姿を見ていたのは以外の人物は、本当に…赤鬼だ…と呟いた

グラハム（これこそが私の望む道…修羅の道だ…！）

シグナム「いざ！」

グラハム「勝負…！」

こうして武士VS騎士の戦いが始まった

お互いに剣を相手の剣にぶつける、その度に激しい火花が散る！

シグナム「やるな…」

グラハム「…ふっ」

グラハムの力に押し込まれシグナムは一旦距離を離すそして

シグナム「レヴァンティン！」

その直後レバンティンから葉莢が排出され炎がレヴァンティンを包む、そしてシグナムはそのままグラハムに接近する

シグナム「紫電一閃！ なにつ！？」

しかし攻撃をしたシグナムが驚きの声を上げた、グラハムは避けるつもりもなく右手に付いた盾で受け止めようとする仕草もない、あくまでも自分の刀で受けるようだ、シグナムは思った、こいつは騎士だと、なんて正々堂々した戦闘スタイルであるのかと、戦ってこんなに満たされる気持ちになったのは久しぶりだ

シグナム「はあ…！」

だが、だからこそ負けられない、ヴォルケンリッターの一人として、騎士として、目の前の男に負ける訳にはいかない、シグナムは全力でレヴァンティンを振りかざした

グラハム「おおおおお…！」

グラハムもまた己の中から歓喜の音が聞こえた、あの少年以外でこんなにも自分を満たしてくれる戦いがあったとは…シグナムの剣をGNロングサーベルで受けながら思った

グラハム「なんという僥倖…」

シグナム「何…？」

グラハム「生き恥を晒した甲斐が、あったというもの…！」

シグナム「くっ！…まさか私の紫電一閃を初めて受けたにも関わらず防ぐとは…！」

〈視点変更〉

ヴィータ「やるな…アイツ…」

エリオ「凄い…あのシグナム副隊長と互角なんて…」

スバル「むしろ圧倒してる感じ…」

ティアナ「…」

キャロ「すごいですう…」

なのは（…生き恥を…晒す…？）

なのははグラハムの発言に疑問を持った、生き恥…六課に協力する

事？いや…違う…もっと何か別の事…
…なのは心の中で答えを探しながら、グラハムとシグナムの戦闘を見ていた

（視点変更）

お互いの剣が何度も何度も交差する、しかしお互い決定打を与えずにいた、焦れて先に動いたのはシグナムだった

シグナム（ならば、これで！）

シグナムはグラハムの真上を取り

シグナム「シュランゲンフォーム！！」

するとレヴァンティンは鞭のような形になりグラハムに迫る、しかしグラハムは一步も退く事無く迫っていった

グラハム（シグナム、確かに貴様は強い、現にデバイスの性能ではこちらが劣るだろう…）

そうなのだ、確かにグラハムのデバイスサキガケはこの世界においては高性能かもしれない、だがグラハムの世界では所詮量産型に改良を施したに過ぎない、GNロングサーベルはレヴァンティンの猛攻に耐えてはいるがサーベルの出力が負けているのか火花が散っていた、もう長くは耐えられないだろう

グラハム「しかし、今日の私は…」

シグナム「なっ！？」

シグナムは驚愕したレヴァンティンのシュランゲンフォームを見て、
も一歩も退く事無く迫っている、大抵これを使うと相手は距離をと
る、さらに驚いたのはグラハムは唯一の盾を捨てたのである、通常、
魔法が使えればプロテクションなどを展開出来る、しかしグラハム
は魔法が一切使えない、つまりこれから先シグナムの攻撃を回避も
しくは剣で受けきるつもりなのだ

シグナム「ふっ…舐められたものだ！」

そう言ったシグナムであつたが表情は楽しそうだ、この男がどんな
事をしてくれるか楽しみでしょうがないのである、がシグナムのそ
の表情はすぐに消えた、なぜならグラハムが向かつて来るであろ
うコースから大きく外れ、かなり無茶な姿勢で突っ込んで来たのであ
る、しかも右手には赤い魔力刃が展開した小刀が握られていた

グラハム「阿修羅すら凌駕する存在だっ！！！」

シグナム「くっ！…！」

シグナムはシュランゲンフォームを解きグラハムと鏖迫り合いにな
った、しかし二刀流のグラハムに対しシグナムは突然の事で体勢が
悪い、グラハムはその瞬間を見逃さずシグナムのレヴァンティン
の上に弾き飛ばした

シグナム「しまった！」

グラハムはロングサーベルを捨てると先程弾いたレヴァンティン

左手に掴むとシグナムに猛スピードで肉薄するシグナムは咄嗟に鞘を掴むとグラハムの攻撃を防御した、鞘と鞘の主が火花を散らす

グラハム「切り捨て…」

シグナム「っ！！？」

グラハム「御免！！！」

グラハム右手の小刀を振り下ろした、シグナムは耐え切れず、地面に激突した

シグナム「くっ…奴は…！！？」

煙の中シグナムが辺りを見回すと後ろからシグナムの首筋に魔力刃が向けられた

シグナム「ふっ…私の、負けか…」

グラハム「ああ、そのようだな」

（視点変更）

ヴィータ「あいつ！シグナムに勝ちやがった…！！」

スバル「か、勝っちゃった…」

ティアナ「こんな事って…！！？」

エリオ「シグナム副隊長が、負けた…!？」

キャロ「凄かったです…」

なのは「すごいねグラハム…まさかシグナムに勝っちゃうなんて…でもあの動き…」

なのは「レイジング・ハート、グラハムの戦闘データ表示できる？」

レイジング・ハート「はい、マスター」

なのは（嘘…こんなので…!?!?）

グラハム・エーカー

戦闘・魔法特性技能

陸戦技能 E

空戦技能 SS+

補助技能 E

戦闘技能 SS+

近接戦闘技能 SSS-

中距離戦闘技能 C

遠距離戦闘技能 E

単体戦闘技能 SSS

広域戦闘技能 E

総合能力ランクSS

模擬戦（後書き）

戦闘能力の表はミラクルルークスさんのを参考にしてしまいました
申し訳ありません

強さの代償

シグナムとグラハムは共に訓練場からなのは達の所に歩いてきた、フォワード陣は二人に詰め寄って話を掛けまくっていた、凄い戦いでしたね！、二人共凄かったです！、今度戦い方教えて下さい！、バリアジャケットは解いても仮面は外さないの？などなどである、シグナムはあまりの気迫にああ…と言葉を出せずにいたが、グラハムは静かに、だが確かに言った、私は凄くなど無いし、強くもない、と…

え？…フォワード陣は固まった、この男は何を言っているのであるうと、模擬戦とはいえシグナムに勝ったのだ、凄くない筈がない

エリオ「でも、グラハムさんh「グラハムさん、ちょっといいかな？」

エリオの言葉を遮ったのはなのである、その目は少し怒っているように見えた

なのは「さっきの戦闘での事んだけど…」

ヴィータ「…」

ヴィータもなのと同じ事を考えているようであるのか、表情が陰しい

グラハム「悪いが、聞く耳持たん、今日は疲れたので部屋で休ましてもらう、シグナム、いい戦いを感謝する」

シグナム「ああ、私もだ、お前と戦えた事を誇りに思う」

グラハム「…今度は全力で戦いたいものだな…」

シグナム「っ・・・！」

そう言い残すとグラハムは廊下を歩いていった…

（視点変更）

シグナム「まさかグラハムは私にリミッターが掛けられている事が分かったのだろうか？」

なのは「多分、そうだろうね、グラハムさん鋭い所あるから」

隊長陣には普段リミッターが掛けられている、これは大きすぎる力を抑制すると同時に使用者の負担を軽減する意味もある、現にシグナムは限定解除すればSランク代だが現在はリミッターの効果でAランク代だ、だがグラハムにはリミッターが掛けられていない、これはまさかグラハムのランクがここまでのものだとは誰一人思わなかった為である

ヴィータ「ランクもそうだが、あいつの動き方尋常じゃないぞ、普通あんな動きしたらすぐに身体が壊れちまう…」

ヴィータの言っている無茶な動きとはグラハムの戦闘スタイルの事である、空中戦が出来ると出来ないではとてつもないアドバンテージ差が出る、この点に関しては問題ない現になのは達隊長陣は空中戦を行っている、問題はその動きだ、スピードが高ければ高い程急

な方向転換は難しくなるし、身体に掛かる負荷も増大する、だからバリアジャケットがあり、その負担を軽減しているのだがそれにも限度がある、その限度があるからこそ先程の戦いでシグナムはグラハムが来るであろうコースが分かった、だがグラハムはその限度を超え、データ上で見れば最高の動き、身体の負荷を考えたなら最悪の動きでシグナムの予想を超えたのである、しかもその動きは一度や二度ではない、シユランゲンフォームの攻撃を避けた時などグラハムの近くにいたら骨の軋む音が聞こえて来そうな程の無茶な動きだなのは「グラハムはなんであんな戦い方を…」

シグナム「…あんな戦い方をしているのではなく、あんな動きしか出来ないのだとしたら？」

ヴィータ「どう言うことだよ！シグナム」

シグナム「うむ…グラハムと刃を交えて少し分かったのだが、何か信念、いや尋常じゃない気迫を感じた…あんな戦い方、その何かの為に自分の全てを捨てないと出来ん…」

なのは「…自分の全てを捨ててまで戦う理由…」

ヴィータ「あたしは、少なくともそんな戦い方を出来る理由は二つしか知らない…」

なのは「二つ？」

ヴィータ「一つは何かを守る為の戦い…はやての為にあたしやシグナム、シャルやファイラみたいに戦った事…」

シグナム「うむ…」

なのは「もう一つは…?」

なのはは出来れば自分の予感が当たって欲しくなかった、だってその理由は悲しすぎるから…

ヴィータ「…復讐だ…」

なのは「…」

当たってしまった、だが同時に納得できる、じゃなければあんな自分を捨てる戦い方なんて出来るわけない…

シグナム「一度、話を聞いてみる必要があるな…」

なのは「うん…」

そんな三人のシリ阿斯モード為、フォワード陣とシャーリーは蚊帳の外だったらしい

シャーリー「ああ…グラハムさんのデバイスを解析してみたい…」

〈視点変更〉

暗い部屋の中、男が洗面所で口元を押さえていた…手の隙間からは血が滴り落ちている…

グラハム「…あの程度の戦闘に身体が耐えられんとは…」

サキガケ「ブシドー、私としてはブシドーの戦闘スタイルは熟知していますが、あのような無茶な動きは控えるべきかと…やはり魔力の割り振りを身体の保護に回すべきです」

グラハムの魔力の量はBランク、つまりは凡人レベルである、しかしその戦闘能力は特化したものでありこの点に関しては並みの魔法使いにまず負けないだろう、だがこの世界においてGNドライブの出力はGN粒子からではなくグラハムの魔力から供給されている、つまり魔力の量が少ないと言う事はサーベルや推力の低下に繋がるのだ、これではまともに戦えない、だからグラハムはシグナムと戦う前にサキガケに魔力の割り振りを全てサーベルと推力に回すように指示していたのである、つまりバリアジャケットは殆ど意味をなしていない、急激なGやダメージをくらう以外は全てグラハムの執念と精神力でカバーしている、とんだ根性論である

グラハム「ふっ…そんな道理、私の無理で決じ開けて見せるさ…」

サキガケ「ブシドー…」

グラハム「そんな事より、マスラオの状況はどうだ？」

サキガケ「はい、あらかた構築プログラムの方は済みましたので、後は微調整だけで使用可能です」

グラハム「そうか…最高の剣と最高のスピードを所望する…」

サキガケ「善処します」

その時、誰かがドアをノックする、グラハムは仮面を着用すると、
ドアを開ける、そこには

グラハム「…なのはか、何か用かな?…」

なのは「うん、ちょっと話と来て欲しい所があるんだけど…」

グラハム「…その目は…どうやら断れる事ではないらしいな…私の
負けだ、案内してくれ」

なのは「ありがとう、じゃ、着いて来て…」

グラハムとなのはは一言も会話をせず目的地についた、だがここは…

グラハム「八神部隊長の部屋に用事か…これは始末書ものかな?…」

グラハムなのはにちよつとしたジョークを言ってみたが、なのはは

なのは「うん、そうなるかもしれないね」

と真顔で言う、これに対してグラハムは「ふられたな…」と余裕の
態度である

ドアをノックし、部屋に入ると中にはヴィータ、シグナム、はやて
の三人が居た、皆グラハムに対して言いたい事があるような目をし
ている

グラハム「いきなりの呼び出しだ、歓迎会と言う訳でもあるまい?
用をいいたまえ」

はやて「じゃあ単刀直入に言うな、先程のシグナムとの模擬戦の結果から判断してグラハム、貴方には能力の限定処置を受けてもらいます」

グラハム「なんだと？…能力の限定…？」

シグナム「ああ、グラハム、要するにリミッターを掛けさせてもらう」

グラハム「私は聞いていないぞ、それに私にはそれほどまでに魔力があるとは思えん」

ヴィータ「確かに魔力の量は並みだ、問題はおまえの戦い方だ！」

グラハム「私の戦い方？」

なのは「グラハムは無茶な動き方をするでしょ？だから四人で話し合った結果、グラハムさんの身体のためにスピードを中心とした能力の限定をする事にしたの…」

グラハム「…」

はやて「能力の限定解除は私しか出来へん、しかも滅多な事では承認できないのや…納得できないと思うけど我慢してほしいん」

グラハム「ククク…」

シグナム「グラハム…？」

突然グラハムが笑い始めたのだから四人は驚いた、反論されると思

つていたからだ

ヴィータ「何が可笑しいんだ?…」

グラハム「こいつは傑作だ…力を貸してほしいと言いながら権力を行使するとはな…」

なのは「っ！それはグラハムの身体のを思つて！」

グラハム「私の為だと？戦場でスピードの遅くなった私が撃墜させれるのが私の為なのか？」

シグナム「今までスピードに回していた魔力をバリアジャケットに回せばいい」

グラハム「それでも的には変わらない」

なのは「だから私達がいるんだよ！仲間が居れば一人で戦うよりもずっと強くなれる！」

はやて「そうや！それにここに居る四人とフェイトちゃんにもリミッターは掛けられてるんよ？」

ヴィータ「でもあたし達は負けない、仲間がいるからな」

グラハム「…とんだ茶番だ…群れた所でそれは本当の強さではない…」

なのは「グラハム…」

グラハム「だが、上の命令には従わせてもらおう八神はやて部隊長」

はやて「ほんまに正し条件がある」　なんや?...」

グラハム「私にライセンスを発行してもらいたい」

シグナム「ライセンス？」

ヴィータ「なんだそれ？」

グラハム「私のいた世界の軍には独断で行動できる免許がある、つまりは」

はやて「時と場合によつてはグラハムの自由に動きたいって事か？」

...」

グラハム「いかにも」

なのは「なっ！？そんなのって!？」

シグナム「うむ、それはもう組織ではない」

ヴィータ「そんなの無理にきまつて」わかった」　はやて!?!？」

はやて「確かに今回はうちらも強引やったしな、グラハム、そのライセンスを認めます、発行が出来次第渡しにいくな...」

グラハム「その誠意に感謝する、さすれば私はこれで失礼」

そう言うとグラハムは四人の前から去っていった...

強さの代償（後書き）

どうでしたでしょうか今回のグラハムは？賛否両論だと思います
誤字脱字、違和感があったら言って下さい

グラハム「多少強引でなければ六課の連中は口説けません…」

作者「…」

戦いの中で得たもの

ブシドーは今、朝食の食堂を目指して六課の廊下を歩いている、すれ違う六課の人物はグラハムを怪訝な眼差しや、変質者を見たような表情をしている、それもそのはず今の彼の服装は六課の茶色の制服ではなく、アロウズの緑色の羽織を着ており、顔には相変わrazuの仮面である、そんな目で見るなど言う方が無理だろう、フェイトがその服はあまり着ない方が…と言っていたが…だが彼はまったく気にしていない様子だ、食堂につくと手に朝食を持ち、空いている席に座り、食事を始めた、朝の食堂と言うのはかなり混むのだが、グラハムの居るテーブルには彼以外誰も座ろうとしない

グラハム（私にはこんな日常、むいていない）

グラハムは思った、自分が居た世界では彼は戦いの毎日だった、無論、この世界でも戦闘はある、だが弱い、弱すぎる、敵に歯応えがまったくないのだ、プログラム通りの動きしかしてこないガジェット、こんなものMSでオートマトンと戦っているようなものだ

？「前、いいかな？」

グラハム「む…？」

グラハムが顔を上げるとそこには髪の長い金髪の女性、フェイト・テストロッサ・ハラウンがいたグラハムは気にせず、ああ構わんよ…と言うと食事を続けた、フェイトは女性の中ではかなり美人な方である、現にファンクラブ的なものまで存在しているらしい、そんな彼女が目の前にいるのだ、普通の男なら、なんらかのアクションがある、しかしこの男は普通ではない、興味がないとも言わん

ばかりにノーリアクションである、沈黙に耐えかねたフェイトが口を開いた

フェイト「この前、なのは達から聞いたよ…無茶したみたいだね…」

グラハム「私にはなんの事だが分からんな」

フェイト「この前の戦闘、一人で先行して戦ったって…」

グラハムはこの前なのはとフォワードの四人で戦闘に出ていた、ヘリで目標地点に展開しているガジェットの掃討に行ったのだからのはがチームワークを生かした戦法で敵を叩こうと思っていた矢先、グラハムはあんな機体、私一人で充分だと言い放ちオレンジ色のGN粒子を撒き散らしながらガジエツトに猛進していったのである、これはグラハムがリミッターとやらを掛けられてどの程度までやれるか試す目的があつたのだが、造作もない、相変わらずガジエツトの攻撃はグラハムに当たりもせず全一太刀で撃破されていた、これにはグラハムも拍子抜けである、その様子をフォワードの三人は賞賛していたがティアナは複雑な表情で、なのはは怒りの表情で見ている、六課に帰還中なのはは何故あんな事をしたのかと問い詰められていたが、グラハムは早く作戦が済んでよかったではないかとの発言になのはは苦虫を潰した顔で次回からはチームワークを意識して欲しいと告げた、それにグラハムは善処するとの返答、フォワード陣は終始オロオロとした様子だった

フェイト「私もなのはと同じでグラハムにはチームワークを意識してほしいと思う…戦場では何が起こるか分からないから…何かあった後では遅いから…」

グラハム「…」

沈黙…場に重たい空気が流れる、その時アラートが鳴り響いた

なのは『グラハム、聞こえる！？』

グラハム「ああ…聞こえている」

なのは『ガジェット反応が確認されたの！急いでヘリに来て！』

グラハム「承知した…」

フェイト「…」

グラハム「話の途中で悪いが、任務だ、行かせてもらうよ」

そう言い放つとグラハムはフェイトの返答を待たずにヘリに向かっていった

（視点変更）

ヘリ内部

なのは「今回はガジェットの数がいつもより多いの！ロストログアが関係してるかもしれないから皆、気をつけてね！」

フォワード陣「はい！」

なのは「グラハムも今回は仲間を頼った戦い方をお願い！」

グラハム「…ヴァイス、ヘリの後部ハッチを開け」

ヴァイス「!!!?」

なのは「!、グラハム何を!？」

グラハム「ヘリで高町の部隊が到着するまでに数を減らしておく」

なのは「そんな事許せるわけ!」

グラハム「私には八神はやて部隊長より独自行動の免許を与えられている…」

なのは「だからって!」

グラハム「つまりはワンマンアーミー…たった一人の軍隊なのだよ…」

なのは「っ…」

スバル「なのはさん…」

ティアナ「ちよつとあんた、勝手が過ぎるわよ!」

エリオ・キャロ「…」

グラハム「免許があると言った…話はそれだけなら、私は行かせてもらっ、サキガケ」

サキガケ「了解しました、ブシドー」

グラハムの身体がサキガケのバリアジャケットに変わる、後部ハッチから粒子を巻きながらグラハムは空に飛び立った、なのは達はその姿を見えなくなるまで見続けていた…

〈視点変更〉

グラハム「今回もまた、数に頼った戦法か…笑止！」

グラハムに気づいたガジェットが数を生かした弾幕を張ってくる、しかしその攻撃は掠りもせず、グラハムがガジェットの脇を通り過ぎると同時にガジェットは両断される…

グラハム「温い…温すぎる！」

グラハムは三分足らずでガジェット部隊の半数を撃破していた

グラハム「チームワークなど…」

グラハムとてチームワークの重要性を分らない訳ではない、彼は昔オーバーフラッグス隊の隊長を務めていた事があるのだ、なのはの気持ちは理解出来る、現に友と共に戦っていた頃のグラハムの方がいきいきとしていた、だが今の彼は戦いに執りつかれた鬼そのものだった

グラハム「…私は恐れているのか…また友を失ってしまう事を…」

以前少年は言っていた、自分は戦う事しか出来ないと…だがそれは

私も同じ事…

グラハム「では少年と私の差は…」

その時、ガジェットがグラハムの背後から迫る、だがグラハムは気づいていない

グラハム「同じ目標の為に戦う友…守るべきものの差…だと言うのか…」

サキガケ「ブシドー！」

グラハム「…！！？しまっ」

ガジェットの攻撃がグラハムに命中する、直撃は避けたものの不意の攻撃とバリアジャケットの防御能力の低さを突かれ左腕が負傷した

グラハム「ぐあ…！私とした事が…戦いの最中に思いに耽るとは…！」

グラハムは左利きである、さらに今の攻撃でGNロングサーベルを落としてしまい無防備の状態だ、その反撃の隙をガジェットが見逃すはずもなく徐々に追い詰められていく…

グラハム「くっ…スラスタがやられて加速出来ん…！」

グラハムは右腕の盾を構えながら後退する、しかしガジェットは左右に展開しながらグラハムを追い詰める

グラハム「サキガケ！機体状況は！」

サキガケ「損傷率40%オーバーです！」

グラハム「ちっ…マスラオは使用可能か!？」

サキガケ「損傷でシステム障害、使用不可です、ッ！囲まれています！」

グラハムの周りにはガジェットが円を書くように囲んでいた

グラハム「…ふ、戦いに敗れた私に相応しい最後だな…ダリル…ハワード…今逝くぞ…」

グラハムは目を閉じ、最後の時を待つ、爆発音、

グラハム「意外と痛みはないものなのだ…」

グラハムが目を開けるとそこには、桃色のGNバズーカに匹敵する威力で敵を撃破するなのは姿があつた、よく見るとフォワード陣も展開し、ガジェットを各個撃破していた

なのは「だから、あまり無茶しちゃ駄目って、もっと仲間を頼ってって言ったでしょ？」

そこには優しい表情をした高町なのはがグラハムの事を見ていた

和解と歪み

シャマル「はい、じゃあ一応、安静にしていして下さいね」

グラハム「かたじけない…」

シャマル「ふふ、じゃあ私は行きますけど大人しくしてて下さいね」

グラハムは今医務室でシャマルに怪我の手当てを受けた所だ、大した怪我ではなかったがあの後なのはに治療に行くように言われたのだ、流石のグラハムも助けられたとあっては断る訳にもいかず、現在に至る

グラハム「高町、なのは…」

彼女は強い、先程の戦闘で分かった、最初はチームワークなどと言う何処にでもいそうな女であったがグラハムとはまた別の次元の強さを持った女性であった、グラハムはひたすら己を磨き、一人で戦ってきた、戦場で最後に信じられるのは自分だけである、だがのはは違う、彼女は仲間や守るべき者が居る時にこそ真価を発揮するらしい、現にグラハムを助ける時など化け物じみた砲撃や攻撃を何度もしていた、

グラハム「確かめて見る必要があるな…」

グラハムはそう呟くと医務室を後にした

廊下をなのはが何処にいるのかも分からずに歩き続けるこの男、そう彼こそが誰よりも我慢弱く落ち着きのない乙女座のセンチメンタ

リスト、グラハム・エーカーその人である

グラハム（…高町なのはの居場所をシャマルに聞いておくべきだった…）

そう後悔しているグラハムの前に身体付きのいい犬耳？を生やした男が歩いてきた

グラハム「すまない、聞きたい事がある」

？「私に何か用か？」

グラハム「ああ、高町なのはが今何処にいるか知りたい」

？「訓練場に居たのを見かけたが…」

グラハム「感謝する、では失礼」

？「待て、好きにやるのはいいが、主はやてに迷惑を掛けるような事は辞めてもらおう」

グラハム「はやて…？君は？」

ザフィーラ「私の名はザフィーラ、主を守るヴォルケンリッターの一人だ」

グラハム「…承知した、姫君にはナイトがついているとな」

ザフィーラ「…」

そう言い残すとグラハムエーカーは訓練場へと猛進していった

〈視点変更〉

なのは「はい、じゃあ一旦休憩！」

ティアナ・スバル・エリオ・キャロ「はい！」

現在、訓練場でなのは指導によるフォワード陣の訓練が行われている、主な内容は基礎を中心と応用である、特に怪我などに対してなのは敏感である、自分のようになってほしくないと言う心情があるのだろう、特に今日のグラハムの事で多少厳しめになっていた、そのなのはの隣でフェイトとヴィータが新人達の動きを確認し、的確にアドバイスをしている

フェイト「エリオはもう少し攻撃に対して早く反応できるといいね、キャロは状況をよく見て冷静にね？」

エリオ・キャロ「はい！」

ヴィータ「ティアナはもつとチームを考えて動け、ちょっと自分だけ出すぎだ、スバルは技が単調すぎる、大技でも当たらなければ意味ないぞ」

ティアナ・スバル「はい！」

とまあ、こんな調子である、そこへ来たのが…

グラハム「失礼する！」

大きな声を上げ訓練場に介入したのはグラハムである

フェイト「へ？」

ヴィータ「なっ！？」

グラハム「失礼だと言った」

なのは「グラハム！？怪我はもう平気なの！？」

グラハム「こんなもの、傷の内に入らんよ……」

なのは「でも！」

グラハム「高町なのは、先程は感謝する」

なのは「ああ、そんな事、別に感謝される程じゃないよ、それに仲間を助けるのは当たり前だよ」

グラハム「実は頼みがあるのだ」

なのは「頼み？私に出来る事ならいいよ？」

グラハム「私と戦ってもらいたい、エースオブエース」

一同「ええ〜！！？」

フェイト「そ、そんな無茶だよ！」

ヴィータ「そうだ！お前負傷したばかりじゃないか！」

なのは「にやはは…グラハムらしいけど…それは無理かな」

グラハム「邪険にあしらうか…」

なのは「そうじゃないよ、じゃあグラハム、今デバイス持ってる？」

グラハム「無論だ！…なに！？私のデバイスがないだと…」

グラハムのデバイス、サキガケは戦闘による損傷で現在、ジャーリ
ーの所で修復中である、今のグラハムの状況は刀を持たない侍であ
る、流石のグラハムもデバイスがなければ凡人に過ぎない

グラハム「くっ…私とした事が…」

なのは「にやはは、まあそう落ち込まないで、今日はフォワードの
訓練でも見ていったら？」

グラハム「訓練？」

なのは「そ、これからは一緒に戦う仲間なんだから、無駄にはなら
ないと思うよ？それに見て気づく事もあるしさ？」

フェイト「いいかもね、グラハム、今まで一人で戦ってたし」

ヴィータ「今回の事は自業自得だけだな」

グラハム「…借りが返せない以上、なのはの言う事には従おう…」

なのは「あれ？てつきり私は聞く耳持たん！とか言って帰っちゃうかと思ったよ」

ヴィータ「私には免許がある！もな」

グラハム「…くっ…私の顔に何度泥を塗れば気が済むのだ…っ！」

フェイト「まあまあ…でも見ていくんでしょ？」

グラハム「ああ…では静観させてもらおうか」

なのは「ふふ、素直じゃないんだから、じゃあ皆！訓練再開するよ！準備はいい？」

フォワード陣「はい！」

ティアナ「ハアハア…」

スバル「どうでしたか？…」

エリオ「…疲れた」

キャロ「私もです…」

なのは「うん！さっき言われた事をちゃんと出来てるね！グラハムはどう思っ？」

フォワードの練習を静かに腕を組みながら見ていたグラハムは腕を

解き、なのはの問いに答える

グラハム「ティアナ・ランスター」

ティアナ「…」

グラハム「チームとしてのリーダーの素質はある、しかし些か自分を中心に考えている節がある、チームリーダーは一刻と変化する戦場での確かつ冷静に最善の作戦を考える必要がある、私からみれば危なっかしいな」

ティアナ「…っ！」

グラハム「スバル・ナカジマ」

スバル「はい！」

グラハム「攻撃の威力は評価しよう、あれをまともに食らえば私とてただでは済まんだろう、しかし動きが簡単に読める、これではレベルの強敵と対峙した時苦戦するだろうな」

スバル「はい…」

グラハム「キャロ・ル・ルシエ」

キャロ「は、はい！」

グラハム「君に関してだが私からは何も言えん、私は魔法関係に疎いのでな…だが仲間をサポートする面では優秀だろうな」

キャロ「あ、ありがとうございます！」

グラハム「さて…残るは、エリオ・モンディアル」

エリオ「はい！」

グラハム「…いい目をしている…」

エリオ「…へ？」

グラハム「一度、手合わせしたい所だな…」

エリオ「ぼ、僕もグラハムさんとは一度戦ってみたいと思ってました！」

グラハム「ああ楽しみにしているよ…悪いが急用を思い出した、一足早く帰らせてもらう」

そう言うとグラハムは去っていった…訓練場にはなんとも言えない微妙な空気だけが残った

フェイト「…なんか、嵐みたいな人だね…」

ヴィータ「イマイチわけわかんねえなアイツ…でも」

なのは「うん、四人のアドバイスは的確だったね…今見たばかりなのに…やっぱりグラハムは過去になにかあるのかな…」

フェイト「ない、と思わない方が不自然だね…」

ヴィータ「少なくともアイツは強い、それもシグナムと互角以上だ」

なのは「でも少しは仲間の事を、私達を仲間と認めてくれたのかな？」

フェイト「そうだいいね」

ヴィータ「アイツはそう簡単に改心するようには見えないけどなあ」

三人がグラハムの事を考えている時、ティアナ・ランスターは一人不快感を心に宿していた

ティアナ「なんなのよアイツ…いきなり来ていいだけ言っ…私の何が分かるって言うの、私の…っ」

（視点変更）

はやては部屋で事務処理に追われていた、機動六課は戦闘だけではなく事務もこなさなければならぬのだ、むしろ束縛時間では事務関係の方が多い

はやて「はあ、やる事が多過ぎて目が回る…！あかん…！こんな事でへこたれる私やないで！」

グラハム「失礼」

はやて「！？な、グラハム…！？いつのまに…！？」

グラハム「ノックしても返事がなかったのな、勝手に入らせてもらった」

はやて「気がつかない私も悪いんやけど、女の子の部屋に勝手に入るちゅうのは感心せんな…」

グラハム「だから失礼だといった」

はやて「はあ…あかん、頭痛が…で、何か用なん？」

グラハム「用があるからここに居る、これを渡しに来た」

はやて「？これはグラハムのライセンスやんか、何で私に？」

グラハム「一時的に預かってもらいたい」

はやて「グラハム、今日の戦闘で頭でもうつたんか？」

グラハム「私をどうゆう目で見ているのだ…まあいい、それを返してもらった時、それは私がエースオブエースをとの勝負に勝った時だ」

はやて「エースオブエース！？なのはちゃんに勝った時って…行っちゃったわ…」

マスラオ

グラハム「詰めが甘いつ！」

エリオ「くっ…！」

現在訓練場で戦っているのはグラハムとエリオである、グラハムはあの日を境になのはに必要に戦いを迫っているだがなのはそれを適当な理由であしらっている、なのはじゃあエリオと訓練したらどうか？と切り出したのである、グラハムとしては不本意だがエリオとは一度戦ってみたいと思っていたし、それにエリオが喜んでいたのもある、グラハムも子供に対して邪険にする事も出来ず、現在に至る訳である

エリオ（なんて速さだ…しかも攻撃の一撃一撃が重い、故に攻撃を受けるだけで精一杯で反撃に転じることが出来ない）

エリオ（なんとかして、反撃の糸口を…！）

グラハム「戦いに集中せんかつ…！」

サキガケのGNロングサーベルがエリオを吹き飛ばした

エリオ「しまった！ストラダー！」

グラハム「遅い！」

エリオの反応は間に合わず、グラハムのサーベルの刃がエリオの首筋付近で止まる

なのは「そこまで！グラハムの勝ちだね」

エリオ「ハアハア…ありがとうございました！」

グラハム「動きは悪くなかった、後は経験を積む事だな」

エリオ「はい！あのまた勝負していただけますか？」

グラハム「私でよければ構わんよ、私も楽しみが増えたしな」

なのは「相変わらずグラハムは手加減無しだね」

グラハム「戦いにおいて手加減など相手を侮辱するに他ならない、全力の勝負、これが私の信条だ」

シグナム「まるでなのはみたいだな」

なのは「え？どういう意味？」

シグナム「いや、何でもない」

フェイト「でもエリオの動きも前より随分とよくなったね、これもグラハムのお陰かな？」

グラハム「私は何もしていない…ただなのはと戦いたいだけでその為の条件を飲んだに過ぎんよ」

なのは「にやはは…」

シグナム「だが、いい加減グラハムと戦ってやったらどうだ？」
指名を受けているのだぞ？ 私ならいつでも構わんのだが」

グラハム「悪いが今私の目に写っているのは高町なのはのみだ」

なのは「あはは…それ他所で言わない方がいいよ…」

フェイト「でもこれじゃあ、グラハムが少し可哀想だね…よし、私
でなければ相手になるよ？」

グラハム「何？」

なのは「フェイトちゃんいいの？」

フェイト「うん、私は構わないよ、それに約束は守らないとグラハ
ムが拗ねちゃうよ」

なのは「約束した覚えはないんだけどなあ…でもフェイトちゃんは
強いよ？ 私と同じ位に」

グラハム「ほう…それは興味深いな…一つお手合わせ願えるかな？
…」

フェイト「うん、お手柔らかに」

シテージを廃墟都市に設定、荒れ果てたビル群がる場所である、そ
こにフェイトとグラハムが距離を取り対峙する

グラハム「全力の勝負を！」

フェイト「うん、グラハム相手なら手加減は出来ないしね…」

フェイト「バルディッシュ！」

フェイトがデバイスに命令を下すとフェイトの身体が黒を基調としたバリアジャケットに包まれた

グラハム「接近戦が得意と聞いているが？」

フェイト「うん、そのつもりだよ」

グラハム「ふっ…さすれば…！マスラオ…！」

マスラオ「了解、ブシドー」

グラハムの身体が光りに包まれバリアジャケットを身に纏った、だがその姿を見て四人は驚いた、いつもの赤色のサキガケとは違い全身が黒を基本とし脛、肩の一部分、そして仮面のようなものが赤色で細身の武士のような姿だったからだ、最大の特徴は頭が鎧兜のような形をしている事である

シグナム「これは…」

なのは「デバイスを改良した！？」

フェイト「本気だね…」

グラハム「驚くのは戦ってからにしてみらおうか…」

フェイト「バルディッシュ、アサルトフォーム！」

バルディッシュ「了解」

グラハム「いざ尋常に勝負！」

お互いに一步も引かず剣を交えながら交差し空中戦に移行する、驚くべきは二人のその速さである、速度があるせいで一般人にはオレンジ色と黄色のレーザーポインターを滅茶苦茶に動かしているようにしか見えないだろう

なのは「すごい…！」

シグナム「ああ、グラハムの奴私と戦った時よりもスピードが増している…」

エリオ「フェイトさんと互角!？」

二人は一度剣で組み合った後、後ろに退く

フェイト「やるね、グラハム…それにそのマスラオも…」

グラハム「まだ全力を出したわけでもあるまい? 続きといこうか」

フェイト「うん…」

ファイトは自分が剣をグラハムと合わせる度に押されている事に気づいていた、スピードはほぼ互角である問題は武器、フェイトがバルディッシュのみに対しグラハムは太さと長さの違う魔力刃を巧みに使ってくる、最初フェイトはグラハムのマスラオを見て驚いたが多分なのは戦の為に作ったであろうと、つまりはいくら新型でもグ

ラムは慣れて居ない為こちらが有利と感じていた、しかしグラハムの剣筋にはそれがまったく感じられない、むしろ使い慣れている、ずっとそのスタイルで戦っていたと確信させられるものだった、

フェイト（だったら状況が悪くなる前にいつきに！）

フェイトはグラハムの前に躍り出てバルディッシュにザンパーモードを命じた

フェイト「これで！」

しかしグラハムはそれを二本のサーベルで受け止めた

フェイト「な！？」

グラハム「それが君の奥義か…さすれば！」

グラハムはフェイトの攻撃を弾くと二本のサーベルを構え

グラハム「…とくを見るがいい…我が盟友が作りし、マスラオの『奥義』を…！」

その瞬間マスラオの周りがオレンジ色の粒子がで包まれ、真っ赤に燃えているようになった

フェイト「何をするのか知らないけど…これで！」

フェイトは無防備なグラハムに切りかかる、今までで一番速く、一番強烈な攻撃である、だがグラハムに攻撃が届くことはなかった

フェイト「な!?!」

シグナム「何!?!?!」

なのは「消えた...!?!」

エリオ「フェイトさん後ろ!?!」

フェイト「え...?!」

グラハム「切捨て...」

フェイトが後ろを振り向くと二本のサーベルを振り上げたマスラオが目についた、回避を...いや間に合わない防御だ、どうにかシルドを張ることが出来たが、マスラオのサーベルに当たった瞬間、紙のように脆く切り裂かれた...

グラハム「御免!?!?!」

フェイト「嘘...!?!」

グラハムの攻撃が命中しフェイトは地面に叩きつけられる、フェイトは煙が立ち込める中立ち上がると先程のグラハムの動きを思い出した

フェイト（あれは速いとかそんなものじゃない...瞬間移動...）

フェイトの最大の誤算は思考する余裕があると判断した事、次の瞬間その判断は間違いだった事に気づかされる

グラハム「隙有りだ…」

フェイト「…っ!？」

グラハムの左腕から構えられたサーベルがフェイトの後頭部に突きつけられていた

フェイト「そうだね…私の負けみたいだね…」

同時にグラハムを纏っていた赤い光りは収まり、元の黒いマスラオに戻った

グラハム「私に奥義を使わせ、さらにその攻撃に反応するとは…そこが知れないな…フェイト・テストロッサ…」

フェイト「ううん、私の完敗だよ…戦場だったらやられてた…グラハムが敵じゃなくてよかったよ」

なのは達は思った、この男は何者なのかと、あのフェイトを無傷で負かしたのである疑わない方がおかしい、いずれ必ずグラハムに話を聞く決心をしたのはであった…

力への渴望（前書き）

前回、台詞の前にキャラクター名前を書くのはどうかとのコメントがあつたので今回は試験的に書かずに、今後の参考にしますので評価の方よろしく願います

力への渴望

現在、グラハムは六課のメンバーと同じテーブルにて朝食を取っている、これは一緒にご飯を食べない？と誘いを受けたためである、主になのはやフェイト、初めは断っていたが彼女達が食堂に来る度に声を掛けてくるのでグラハムが折れた形だ

「それにしても、グラハムって本当に訓練と任務以外は無口だね」

「そうだよ、せっかく皆で食べるんだから何か話せばいいのに…」

となのはとフェイトの問いに、グラハムは

「女性との話題にはついてゆけん…」

である、だが確かにこの機動六課の殆どが女性である、しかも皆美人や美少女の部類だろう、普通の男性なら天国だがグラハムのセンサーはまったく反応しない…そう、彼のセンサーに反応するのはガンダムとその少年だけである…彼の名誉の為に言っておくが彼は男色家ではない…と信じたい…

「じゃ、じゃ質問いいですか！」

食器に大量の食べ物を乗せたエリオが手を上げながら言った

「ご期待に応えられるかは分らんが、構わんよ、言ってみたまえ」

「この前のフェイトさんとの模擬戦に使ったあの赤く光るのはなんなんですか？」

「何それ？」

「ああこの前データで見してもらったあれはうちも気になるなあ」

「赤く光ったと思ったらあれだ…一瞬目を疑ったぜ…」

「うむ、あれには私も興味がある」

と予想以上の喰い付きだ、グラハムは技術的な物なので私はあまり詳しくない、代わりにマスラオに説明させる事にした

「あれはブシドーの世界の技術でGNドライブ内のGN粒子を全面開放する事によってスペックの三倍以上の力を引き出せるまさに奥義です、分かりやすく言うところの奥義をエリオさんが使ったとするとデータ上ではヴィーたさんやシグナムさんに互角かそれ以上で戦えます」

「すごい…！」

「反則やんそれ…」

「エリオが私に…」

「しかし、そんな凄い力なのだ、何かリスクがあるのではないか？」

と、シグナムのもっとものな疑問にグラハムは

「いや、ない」

「（ブシドー…）」

グラハムは嘘をついた、確かに奥義、トランザムは凄いい、攻撃力、防御力、速度、戦闘に必要な物の殆どが劇的に上昇する、そこに嘘偽りはない、問題は使用した後だ、擬似太陽炉が限界までトランザムを使用すると必ず壊れる、これはGNドライブ内の粒子残量が0になる為だ、しかも最大使用時間は1分あるかないか、まさに諸刃の剣、フェイトとの戦いに使った際は5秒間程度な為グラハムに影響はなかった、だがマスラオのGNドライブはGN粒子で動いていない、変わりにグラハムの魔力を使用する、さらにマスラオのトランザムは未完成な為身体の事を殆ど考慮していない、現に元いた世界での戦闘でトランザムを使った場合、グラハムは必ず吐血している、これを限界まで使う…最悪の事態になりかねない

「確かに私と戦った後も普通だったしね」

「便利だね、グラハムのいた世界は」

「じゃあグラハムさんのデバイスが言ってるブシドーって言うのはなんなんですか？」

「私も聞きたかった事ですう」

「…勝手にそう呼ぶ、迷惑千万だ…」

「じゃあ次は私がいいかな？」

なのはは少し躊躇する素振りを見せた後、意を決し言った

「その仮面はなんの為に付けてるのかな？外した所、見た事ないん

だけどなあつて…」

一同が沈黙し、グラハムの仮面に視線が集中する、確かに彼は一度たりとも外して現れた事がないのだ

流石に部屋では外していると思うが、最近グラハムの態度が丸くなつたのは皆感じていた、勝手な事はしなくなつたし、模擬戦に参加したり、気軽に会話が出来るようになった、それでも仮面だけは外さない、なのは質問の返答を一同待つ

「…戒め、と言つておこつたか」

戒め…？なんのだろうか？やっぱりグラハムの過去には何かある、だがその先は聞けない、いや聞いてはいけないのだ、こればかりは彼から話してくれるまで待つしかない…重い空気が流れる…そこへヴィータが突破口を開く

「そういえばお前、何歳なんだ？」

「25位かな？」

「私は28位だと思ふなあ」

「じゃあ大穴で23！」

「それはちよつと若すぎだと思ふけど…二十台つてのはあつてゐんじゃないかな？」

「…32だ」

「え…？」

「32だと言った」

一同「ええゝ!!?」

「おっさんじゃなか!」

「こら!失礼やで!ヴィータ!」

「しかしこれは私も驚いたな…」

「若く見えただけ…」

グラハムに質問攻めしている中、ティアナ・ランスターは一人立ち上がると

「私は先に失礼させてもらいます」

とどこかに行ってしまった

「ティア、どうしたのかな?」

「今日は休日だからどこかに用事でもあるのかもね」

皆があまり気にしてない中、グラハムだけは廊下に消えたティアナ・ランスターを鋭い眼光で見つめていた

〈視点変更〉

ティアナ・ランスターは誰も居ない訓練場で一人ガジェット・ドロイン相手に模擬戦をしていた、ガジェットを次々と撃破する中逆に焦りの表情を浮かべていたのはティアナだった

「もっと…強くならなくちゃ…」

「もっと…」

「…力を手に入れた後、どうするつもりだ?…」

ティアナが声のした方向を振り向くと、そこには壁に背をつけ、腕を組んだグラハムがいた

「御邪魔だったかな?…」

「何か用ですか?…」

「いや、特にはない」

「じゃあ、私は忙しいので」

ティアナは再び訓練を始めた、しかしグラハムは動こうともせず視線だけをティアナに向けていた、たまらずティアナが中断すると

「用があるなら言っておさい!」

「…君はチームのリーダーがどのようなふうだと考える?」

「…」

「無能なリーダーの指揮で命を落とすのは部下だ、君にはその覚悟があるのか？」

「…っ！私のせいでスバル達が死ぬって言いたいんですか！？」

「今のままなら間違いなく…」

「馬鹿言わないで！私はそうならないように訓練を！」

「その求める力は本当に友の為か？」

「…！！？」

「考えておくのだな、力を求めて何を失うのかを」

そう言い放つとグラハムは訓練場を後にし、残されたティアナは拳を握り締めて俯いていた

「ブシドー、何故あのような事を…」

「かつての自分の姿に重なった、ただそれだけだ…」

「ですがあれでは逆効果です、今の彼女が素直にブシドーの言う事を聞くとは思えません」

「乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない…」

「ハア…貴方は本当に予測不能な人ですね…」

「褒め言葉として受け取っておこう」

この後、グラハムの言った言葉が現実になるのはそう遠くない話だった…

アグスタ

グラハムは今、六課の会議室で今度の任務内容を聞いている内容はホテル・アグスタの警備、ホテルではオークションが行われており、その中にロストログアもあるのだとか、何故そんなオーパーツがオークションに賭けられているかは気になったが直に興味をなくした、この世界の秩序も自分の世界とあまり変わらないと思った為である、悪と正義のゼロサムゲーム、この図式はどの世界でも変わらないよ
うだ…

「そしてこのロストログアにガジェットが反応してくるかもしれへんって事でうちの出番や」

「そして何故ガジェットがロストログアに反応するのが分かったんだ、これを見て」

グラハムは配られた資料に目を通す、ジェイル・スカリエッティ、科学者でありその目的のために過去幾つもの次元犯罪を起こし、広域指名手配がかかっている、生体改造や人造生命体の開発に異常な執念を抱く次元犯罪者…彼がガジェットを作った人物だと書いてあった

「そこでアグスタ内部と外から警護をする事にしたの」

「…私は外の警護に当たらせてもらおう」

「うん、グラハムは外の方がいいね…」

「警護の時位仮面取ったらどうなんや？」

「断固辞退する…」

「はあ…じゃあ早速出発するから皆へりに乗って」

「了解した」

・
・
・

「今ホテルの中だけど今の所以上はなしだよ」

「こちらにも以上はありません」

グラハムはフォワードの四人と行動し、なのは、フェイト、はやてはホテル内、反対側をシグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラの陣形で待機中である

「出来れば、このまま何も無いといいんだけど…」

「そうですね…」

「…どうやらそうもいかないらしい」

「え？」

「敵だ、結構な数だ…」

グラハムが向いている方向には空と陸から攻めて来るガジェットの
大軍が居た、どうやらめばしいロストログアがあつたらしい…

「空の敵は私が相手をする、フォワードは地上の敵を頼む」

「はい！」

「…少年、その返事は私ではなく、君のリーダーにするべきだ」

「あ、はい…」

「ではとくと拝見させてもらつよ、ティアナ・ランスター、君の力を」

「…グラハムさんこそ、この前みたいにはやられないでくださいね？、
なのはさんは今いませんから」

「ご期待には応えよう…私の戦闘に干渉、手助け、一切無用、君は
自分の隊の事だけ考えたまえ…では、マスラオ」

「了解、ブシドー」

グラハムはGN粒子を撒き散らしながら空の敵へ飛翔する、そのス
ピードの速さは驚くべきものだ、あれでリミッター付きなのだ、フ
ェイトやシグナムに勝ったのはまぐれではないと思わされる

「私だって…クロスミラーシュ！」

「はい、マスター」

「いくよ！スバル！エリオ！キャロ！」

「うん！」

「はい！」

〈視点変更〉

相変わらずグラハムは敵の攻撃を回避しては切りの繰り返しである、マスラオの機動性についていけずガジェットは陣形がバラバラで攻撃は単調なものばかりだ

「歯応えがない…これではフラッグを使っても負ける気はせんな…」

戦闘をしながらもフォワードの動きに目をやる、戦い方はわるくない、あれではガジェットなど相手にもならないだろう、だがティアナ・ランスターがクロスファイアの放つ場面でグラハムは目を見張る、

「あれではスバルに攻撃が命中する…フェイクか…何！？本当に打つか！？ちっ！…」

グラハムはマスラオをフォワードのいる場所に向けると全速力で向かっていった…

〈視点変更〉

「いける…！この程度ならあたしにだって倒せる！」

そこにスバルの攻撃も加わり、ガジェットは爆発、次の目標に銃を構える

「クロスファイヤ、シュート!!」

放った魔力の弾が次々とガジェットに命中、だがそこには攻撃の夢中で気がつかなかったがスバルの姿もあった

「しまった！避けて！スバル!!」

「え?…」

だが如何せん反応に遅れ、その攻撃はスバルに命中し爆煙を上げた

「…うそ…」

自分の攻撃が仲間にあたってしまった、放心状態で立ち尽くすティアナ、最悪の事態を想定した、だが…

「自分が乙女座であった事を、これほど嬉しく思った事はないな…」

そこには赤く輝く粒子を纏った、マスラオの姿があった、スバルはグラハムに庇われた形で背後に立っていた

「あ、ああ…」

「ティアナ・ランスター…どうやら私の言った通りの事が起きてしまったな…」

ティアナはただ黙ってグラハムの言葉を聞いていた、放心状態で耳に入っていないかもしれない

「ぐ、グラハムさん！違うんです！今のは！」

スバルがティアナを庇う発言をするがグラハムが遮る

「問答無用、今のは誰がどう見てもフレンドリーファイアである事は明白だ、後の敵は私が始末する、君達は下がっている…」

「…」

「ティア…」

その後、ガジェットはグラハムが大半を撃破した事で戦闘は終了、六課は帰還、グラハムは今回の事をなのは達に報告はしなかった、だからかも知れない、後日あんな事が起こったのは…

管理局の白い悪魔

「…いい攻撃だったな、正直、トランザム無しで当たっていたらこの程度ですまなかっただろう…」

男、グラハム・エーカーは自室でこの前のアグスタ警護中にティアナの攻撃をスバルを庇う形で防御、その際利き腕である、左腕を負傷していた、真っ向からの勝負だったら回避なり両断なりでダメージを喰らわなかったがその時は咄嗟の事だったので癖で左腕で受ける形になった、それは彼の愛機スサノオには左腕にガントレットが装備してあるのだがグラハムが使用していたのはマスラオ型のバリアジャケットである為当然そんな物はなく負傷、と言う訳である

「彼女は自分が凡才でないとそろそろ自覚するべきだな…まああの連中と一緒にではそれも無理か…」

ティアナは確かに六課内でみればランクは低いだろう、だが一般の魔法使いと比べると十分に強い、だが本人にはそれが分からない

「…一つの事を追っていると周りが見えなくなる…私も人の事は言えんがね…」

だからこそそのあの事件だろう、力を求めるがあまり周りの状況が見えなくなってしまう

「…マスラオ、頼んでいたものは出来たか？」

「はい、ブシドーの戦闘データを元にこの世界でも戦えるよう改良を施しました、いつでも使用可能です」

「見事な対応だ、後は機会を待つばかりかな？…エースオブエース…」

その時誰かがドアをノックする、グラハムは素早く仮面をつけると、ドアを開けた、そこにはフェイト・テストロッサ・ハラウンが何か悩んでいる様子でグラハムを見ていた

「邪魔、だつたかな？」

「女性、しかもとびきりの美人が来客したのだ、邪険にあしらう男はいないよ…」

「び、美人…！？」

普段、グラハムはあまり冗談などを言わない、たまに迷言？などは言うが（例、グラハム・スペシャル！）そんな男が美人と言うのだ、冗談か本当か分からない、現にフェイトは顔が赤い

「で、用件は？」

「あ…、そうだった…実は、アグスタの警備後からティアナの様子がおかしいんだ…一緒に居たグラハムなら何か分かると思って…」

「何故私に？」

「うん…他のメンバーに聞いたんだけど曖昧で…」

「フォワードの上官は高町であろう？話は聞いたのか？」

「なのははティアナ達の事を凄く思ってるよ、強くなりたいて気持ちも分かってると思う」

「では直接話をしたのか？なのはとランスターは？」

「え？直接は…してないと思うけど…」

「ほう…それは…」

「どうかしの？」

「少し確かめたい事が出来た、ランスターとなのはは今何処に？」

「多分訓練場だと…！グラハム待って！」

その話を聞くとグラハムはフェイトの制止を無視し、訓練場に足を進める

（視点変更）

「…」

ヴィータは黙ってなのはとフォワードの訓練を見つめる、その目は険しい、ティアナの動きに切れない、これでは…そこへグラハムとフェイトが入ってきた

「あ、もう始まっちゃってる…」

「遅かったな？」

「うん、ちよつとグラハムの所にね」

「どう？内容は？」

「駄目だ、教えられた通りにやらないし、動きにキレがない」

「…」

グラハムはその様子を見つめた、考えていたなのはティアナの葛藤、苦しみ、力への渴望が分かっているはずだ、だがその事を伝えず、ただ訓練をするばかり、あれでは伝わるものも伝わらない…

（…っ！？殺気…）

グラハムが殺気の感じた方向を見るとなのはがスバルとティアナの攻撃を素手で受け止めていた

「レイジング・ハート、モード・リリース…」

「二人とも、どうしちゃったのかな…こんな事、私…教えてないよね…」

「訓練の時だけ言う事を聞いて、実戦にこんな事してちゃ…教導の意味がないじゃない…」

ティアナはなのはから距離を取るとあるう事かなのはに銃口を向ける、グラハムはそれを見た時既にデバイスを持ち、走り出していた…

「あたしは…あたしは…!!」

「ティア…!? 駄目!!」

「嘘だろ!!?」

「ティアナ!?」

「少し…頭を冷やして…反省しようか…」

その凍てつくような言葉の後になのはの砲撃がティアナに迫り、爆発、煙だけが残った…

「成る程、大した威力だ…」

「…どうして、そんな事したのかな?、グラム…」

ティアナの前にはマスラオが居た…いやマスラオに似てはいるが細部が微妙に違う、マスラオで赤かった箇所は白になり左腕にはガンレットそして特徴的だった頭部の二本のツノはマスラオより大型になっていた、グラムはなのはの問いかけを無視しティアナに向き直った

「私の感はよく当たるのだよ…」

「グラ、ハムさん…」

「だがこの状況を作ったのは他でもない自分自身だ、ティアナ・ランスター」

「あたしは…強く…なりたかったただけなんです…」

ティアナの目からは涙が流れ落ちる…勝気だった少女は今や見る影もない…

「…なら、とくと見るがいい…力だけを追い求めた者の末路を…」

「…え？」

そう言い放つとグラハムはなのはの方に向き直り、先程の問いの返答をした

「その言葉、そのままお返ししよう」

「…どう意味かな？…」

「そのままの意味だよ…、高町なのは、君は自分の言う通りに動かなかった部下に教導と言う名の暴力を振るった、これで本当に解決するとしても？…」

「…」

「ランスターの葛藤は分かっていた筈だ、なのに何故、話し合おうともせず訓練を続けた？これはその結果だよ」

「…黙ってくれるかな…グラハム…」

「ふっ…言葉は不要か…」

「黙って！」

「マスラオ改めスサノオ！」

「レイジングハート……」

「はい、マスター」

「了解しました、ブシドー」

「勝負！」

「……」

こうして、管理局の白い悪魔とグラハムの戦いが始まった

「デイベイン……バスター……！！」

グラハムはなのはの砲撃を避けると腰のバインダーに備え付けられている刀、シラヌイとウンリュウを手にもとめて避けた時のスピードでなのはに迫る、

「プロテクション……」

「やはり一筋縄ではいかんか……」

なのはのプロテクションとスサノオの刃が激突し火花を散らす、徐々にだがプロテクションは耐久力を失いつつあった、

「いける……！」

「……バースト」

なのはが命じた瞬間プロテクションは爆発二人は距離をあける、この距離に関して二人の戦闘スタイルはまったく違う、なのは中・遠距離戦での砲撃を得意とし、グラハムは近距離での格闘戦を好む、故に離れては近づき近づかれては離れると言う攻防を繰り返している、その様子はまさに圧巻の一言である

「そうだ…これとやりたかった…！」

初めて高町なのはの目を見た時から感じてはいたが、これほどまでに満足した戦いが出来るとは、言い方は悪いがランスターに感謝せねばならん…生きてきた…これだけの為に今日まで生きてきた！なのはがささず砲撃を放つ、それをグラハムはスサノオの両肩と腹部の装甲を開き、そこから出てきた高濃度圧縮粒子を一塊の球体にしたのはの砲撃に放つ、お互いの砲撃は相殺され爆煙の中からスサノオが躍り出る！、

「アクセルシューター…シュート！」

なのはから光りの弾丸がグラハムに襲い掛かるが、スピードを緩める事無く、むしろ上げていき猛進していった

「あれじゃ直撃するぞ!？」

「グラハムは何を!？」

スサノオの二本のツノの間に光りが集まり円状の形をしたそれはアクセルシューターに当たるとそれを両断、なのはは予想外の攻撃に動揺するが直に立て直しシールドを展開、それを防ぐ、しかしグラハムが迫り刃を振り下ろす

「同じ事だよ…」

「さて、どうかな!」

「っ!?これは」

スサノオの色が赤く光り輝いているこの前言っていたシステムなのだろう、しかも先程とは違いグラハムの刃はシールドを簡単に両断してしまった

「やるね…でも!」

「私は純粹に戦いを望む!」

「何の事!?!」

「戦いに集中せんか!」

グラハムの蹴りがなのはに命中し下に吹き飛ぶ、しかし体勢を直に直すとディバインバスターを放つ、だが機動性が高すぎる為に掠るだけで致命傷を与えられない

「…!…!」

「あんな動き…」

ティアナとスバルはその戦いをただ見ていた

「どうして戦う事しか出来ないの!?!」

「それが私の全てだからだ！」

「そんなのって…！」

「勝利の為だ！」

「勝つ事だけが目的なの！？」

「その他に何がある…！」

「仲間や友達を守る為の戦いだってあるよ！」

「だがランスターを打ち落とそうとした！」

「…っ！私は…！」

「ブシドー！トランザム限界時間です！これ以上の使用は身体が！」

「聞く耳持たん！」

（身体…！？）

「隙有りiiiiiiiiiiii！！！！」

「あぐっ…！！しまった」

なのははグラハムとの鏖迫り合いに負け弾き飛ばされた、そこにサノオがシラヌイとウンリュウを合体させたソウテンで迫る！そのスピードはなのでも捕らえきれず、避ける事も防ぐ事も間に合わ

ない

「高町なのは！引導を渡す！切捨て！…御免っつ！…！」

ソウテンがなのはを捕らえる瞬間、スサノオの背後にあるデバイスの形をしたGNドライブが爆発した、そうGNコンデンサ内の容量が0になったのである、それはグラハムの魔力が完全になくなった事の現れでありバリジャケットが姿を保てずその勢いのままグラハムはなのはに突っ込んだ

「グラハム！」

はのははグラハムを庇い地面に激突した、なのはが目を開けるとそこには全身から血をながしているグラハムがぐったりとなのはに凭れ掛かっていた…

「グラハム！どうしてこんなになるまで…」

「…男の誓いに…訂正はない…」

「誓い？…今はそんなことよりも、手当てを！」

「そんなことよりも今度はなのはが私に誓え…」

「え？…」

「もう今回のような事は起こさんと…ランスターと話しあうと私に誓え…」

「分かったから！今は手当てを！」

「スサノオ！」

「ブシドー！？もう限界です！戦闘の続行は…早くしろ！！」…
了解しました、ミスター・ブシドー…」

グラハムは無理やりバリアジャケットを展開するとなのはから少し離れた所に降り立った、その姿は酷く、所々から火花が、ある所はジャケットが展開出来ない所もある、頭部はツノが吹き飛びオレンジ色のフェイスカバーが露出した状態である

「さあ…私を撃ち貫き、その手に勝利を掴んで見せろ！…」

「…そんな事、出来ないよ…」

なのはの頬に涙が流れる

「なのはの覚悟はそんなものか！？私を失望させるな！それともさっきの言葉は嘘か！？」

「…分かった…」

なのはは目を瞑り、覚悟を決め、グラハムを真っ直ぐ見つめる

「いい目だ…それでこそ私の好敵手…」

グラハムは刃こぼれしているソウテンを左腕で掴むと今ある全力でなのはに迫る

「もうこんな事は絶対にしない！…だから…」

「デ^グイヴァイン…バスター……！！！」

「よく言ったああ！！高町なのはああああ！！！」

グラハムは砲撃の光りに包まれ、この戦いの幕は閉じた

変革の兆し

「…見知らぬ天井…ではないな…確か、ここは…」

「医務室やで」

グラハムが頭を向けると八神はやてが心配と安堵の表情でグラハムを見て答えた

「気を失っていたのか…何時間寝ていた？」

「一日と5時間程やな…なのはちゃんに後でお礼を言いや、任務の時間までほとんどつきつきりやつたんやから…」

「それはそれは…っ!…」

グラハムは体を起こそうとしたが激痛が走った、無理も無い、トランザムの限界時間まで使用、さらに砲撃を受けたのだから、非殺傷設定が無ければとつくに涅槃にいる

「任務に行かなければ…」

「今日は休みや!、それにそんな体の人間を働かせる程六課は人材不足やないし、私もそこまで鬼や無い…ほんまに心配掛けてばっかりやな、グラハムは…」

「麗しい女性に心配されるなら、無茶をするのも有りだな…」

「な!?!? なななノノノこんな時にまで冗談なんか言って! 終いに

は怒るで!？」

「ふっ…それより、ティアナ・ランスターはどうだ?…なのはは話したのか?」

「あ、うん…ティアナは今回の事があるから作戦には今回参加させへんかったんや、なのはちゃんは帰ったら必ず話すゆつてた…」

「そうか…なら、やる事がある…」

「!?!?そんな体でどこいくん!?!」

「リハビリを兼ねて散歩でもしてくるよ…何、直に戻るさ…はやても行くといい、仕事があるのだろう?」

「分かった、でももう無茶はいかんよ?」

「了解した」

そう言うと二人は医務室を後にした

〈視点変更〉

ティアナ・ランスターは現在六課の外で一人、思いに耽っていた、今回の事で任務から外されてしまった為である、本当は行きたがったが、グラハムに庇われそして負傷させてしまった負い目がある為、潔く引き下がった

「あたしは…」

「私は、お邪魔かな？」

そこへグラハムがおぼつかない足取りでティアナに近づいてきた、ティアナはその姿を見ると死人にあつたとても言いたそうな表情になる

「グラハムさん！…平気なんですか！？」

「…伊達に鍛えていないさ…」

「…」

「…」

しばしの沈黙、先に口を開いたのはティアナであつた

「あの！…」

「ん？」

「すみませんでした…」

「気にする事はない…あれは私の独断に過ぎんよ…」

「…」

「あの戦闘を見て分かっただろう？、力だけを求めた者の末路が」

「でも、あたしは！」

「全てを失ってまで力を手に入れる覚悟はあるのか？…力を手に入れたら一度失った仲間は二度と戻らん！」

「…！…」

「私にもかつて仲間が居た…私には勿体無い位のな…」

ハワード…ダリル…エイフマン教授…他にも数えられない位の友や友人、恩師を失った…だからグラハムは力を欲した、仇を、誇りを、全てを賭けて、それでも結局彼の願いは叶わなかった…グラハムは仮面に手をやりティアナの前でそれを外した

「君には私の面影を感じた、だからかも知れん…」

ティアナはグラハムの素顔を見て驚愕した、顔の左側には大きな痛々しい傷跡が首、服の上の為分らないが体にも伸びていた

「今ならまだ間にあう、その力、自分の為だけではなく仲間の為に使いたまえ…」

「…うつ…ひつく…」

「そうすれば、仲間は君を想い、君をさらに強くしてくれる…」

グラハムの顔はとてもやさしい表情をしていた…

「…はい…！」

「いい面構えになった…私はもう不要だな…」

「後でなのはから話があるとだろう、そこで君は君の気持ちをぶつけたまえ、なのはは必ず応えてくれるだろう」

「はい、必ず…」

「では、私はもう行くとしよう、流石の私でもあれは堪えた…」

「…」

「…後、ティアナ・ランスター、あの攻撃、あれはかなり効いたよ」

「!」

グラハムはその場を後にしティアナはその後姿を見えなくなるまで見つめていた、後になのはとティアナは話し合い、お互いに謝罪、なのははティアナにクロスミラージュの新たな能力を説明し和解した

・
・
・

「しかし、休日と言うのも何をしていいか考え物だな…」

グラハムは現在、自室にて休養中である、スサノオも損傷が酷い為、シャーリーに預け、修復中である

「ふう…たまにはいいかも知れんな…」

グラハムは戦いだけの毎日を送っていた、それはガンダムの執念だ

けである故に休みなどまともに取った事がない、それが彼の生きる道だった

「ハワード、ダリル…私だけこうしてのうのうと生きていていいのだろうか…」

その時である、彼の部屋を誰かがノックする、グラハムは重い足取りでドアを開ける

「やあ…こんな時間にどうしたのかな？なのは」

「グラハム…」

「ごめんなさい…！」

「謝る必要などない」

「だけど…！」

「話は出来たか？」

「…うん…グラハムの言う通りだったよ…私はいつかは分かってくれると思って話し合おうともしなかった…でも話してみなくちゃ分からない事だつてあるよね…」

「…ああ、そんな事で人と人が分かり合えるなら戦争など起こらんよ」

「…やっぱりグラハムは凄いな…私なんか全然駄目…」

「人間は自分が経験した事でしか物事を語れん…だがなのはもう経験した、目指す道は見えただかな？」

「うん、決まったよ」

「そうか…なら私も生き恥を晒した甲斐があったと言つものだ…」

「本当にありがとう、感謝してもしきれないね…」

「…今日はもう遅い…もう寝るといい、後デバイスが直り次第私も作戦に参加しよう」

「分かった、おやすみグラム」

「よい夢を見るといいな」

「もう、子ども扱いして！」

「私から見ればなのはは充分に子供だ」

「ノノ、じゃ、じゃあ本当におやすみ！」

なのはを見送るとグラムも自室に戻り、床へつく、こうしてグラム・エーカーの戦いのない、平和な一日が終わった

変革の兆し（後書き）

ちよつとずつ丸くなるブシドー、たまにはこんなブシドーもありじゃないでしょうか？

グラハム「それを読者に聞くとはナンセンスだな！作者！」

作者「うわ！？乙女座の変態が来た！」

グラハム「私のしつこさは六課でも折り紙つきだ！離れんよ！作者！」

「くえrちゅいおp@」
「」

武士と姫

「目覚めのいい朝だ…」

グラハムは寝室で朝の日差しを浴び起床した、この前の戦闘で大破したデバイスは依然修理中で任務には置いてきぼりだった、なのでグラハムは長期休暇を満喫していた、なのはとティアナはこの前の事がうその様にいきいきとし、ティアナはグラハムに友好的になつていた、依然は関りを待たず嫌悪感も抱いていたようだが、今はからかつてくるまでになつた

「あんなセリフを言つてかつこつけた割にはなのはさんにボロ負けだつたわね？w」

「何…？貴様スサノオの鎧になりたいのか？」

「あら？スサノオは修理中でしょう？どうやって鎧にするの？ミスター・ブシドー？」

「堪忍袋の緒が切れた！許さんぞ！ティアナ・ランスター！」

「きゃあゝ！なのはさん、スバル、助けて！」

「まあまあ……」

「ティアナ、グラハムにお世話になつたんだからあまりからかつちや駄目だよ？」

「はい！」

「…」

この調子である

「ふっ… まああ言うのも悪くない…」

本心だった、グラハムも今の生活は気に入っている、居心地がいい、しかしここでグラハムはある事に気づいた、フトンに小さな膨らみが出来ているのである

「はて… サンタが冬を先取りしたのか…」

フトンを捲るとそこには少女が寝ていた

「何者だ！さては私に差し向けられた刺客と見た！しかしこのグラハム・エーカー！就寝中はおるか入浴時にすら死角なし！、覚悟！…ん？… ヴィヴィオ…？」

そうその少女はこの前の任務でなのは達が保護した少女、ヴィヴィオだった、彼女がなぜグラハムのベットで寝ているかと言うと、事の経緯は前日に遡る、保護した少女、ヴィヴィオは最初は泣きっぱなしだったそこへグラハム、フェイト、はやての三人が現れ、流石のエースオブエースも救援を發した

「任せて」

フェイトがヴィヴィオに近づこうとしたが、それよりも早くグラハムが躍り出る

「了解した、グラハム・エーカー出るぞ」

「いや、なんのセリフやそれ…」

グラハムはヴィヴィオの傍によると膝を地面につき、目線を少女にあわせ、うさぎのぬいぐるみを持った、一言で言えば異様な光景である、仮面をつけた男が少女相手にコンタクトを取ろうとしているのだから当然である、現にヴィヴィオは若干びびっている今のこの時勢なら一発アウトだ、グラハムはぬいぐるみを顔に近づけると

「やあ！私はグラハム・エーカー、ご覧の通り軍人だ」

「ご覧の通りって…」

「うさぎが軍人なんて私達がびっくりな裏設定だよ…」

「これは失礼した、小さな姫君、私と一つワルツはいかがかな？」

これには回りはドン引きである、しかし以外にヴィヴィオは興味津々の様子

「君の趣味はなんだ？私はガンダムだ…がんだ、む？」そうか！君もガンダムか！」

「乙女座の私にはセンチメンタリズムな運命を感じられずにはいられないな…」

きやつきゃ、ヴィヴィオは何故か泣き止み笑っていた

「…私に育児の才能があつたのか、はたまた私が間抜けに見えたの

か…恐らくは！」

「後者やね…」

「後者だね…」

「後者かも…」

「ぐらはむ、おもしろい！もっとヴィヴィオとあそんで！」

「よく言った！ヴィヴィオオオオオオオオオ！！！」

数時間後

「グラハム・スペシャル！&リバーズ！」

「ぐらはむ、すごーい！」

「出来ないとは言わせんよ！さあトライしたまえ！」

「う、うん…こつ？」

「腰が少しぎこちないが…及第点だな！」

「やったあ！」

「なに子供にやらしとるんや！」

「ヴィヴィオ…まねしなくていいからね…この人は普通じゃないから…」

「やれやれ…これは始末書ものかな…」

「かな…」

「早速真似してるし！」

「私は君をあやす、世界の声などどうでもいい！己の意思でえ！！」
さらに数時間後…

「やだ！ヴィヴィオもぐらはむとおふろにはいりたい！」

「柔肌を晒すとは、破廉恥だぞ！ヴィヴィオ！」

「いや、まだ晒してないし、誤解されるような事を大声で言わない
でよ、グラハム…」

「柔肌を晒すのは大きくなった時の為にとっておきたまえ！」

「うん！」

「子供にいらん知識教えるなや！」

「禁断の愛ですう！」

「うむ、貴様を騎士と評価したが撤回しよう」

「あほだ…こいつ…」

さらに（ry

「ぐらはむと一緒にねるの〜！」

「まさに、眠り姫だな…」

「いや、まだ寝とらんし！」

「てか一緒に寝るつもりだったの？…グラハム…」

「どれ程の罵声を浴びようとも…今日の私は…阿修羅すら凌駕する存在だ！」

「寝る気だったんだ…」

「私とて人の子だよ…口惜しさは残るが…」

「うわぁ…」

「グラハム、ロリコンだったんだ…ちょっとショック…」

「冗談だ」

「グラハムの冗談は本気が分からないから…」

「怖いよね…」

「うん…」

「ほんまにや…」

(ry

「つまりフォーメーションをEからCに変更する訳だ」

「うんうん」

「…何の話してるん？」

「世界の紛争についての考察と解決策だが」

「嘘やん！絶対に嘘や！」

「はやてちゃん、落ち着いて！」

「そこで空中変形をする、名称はグラハム・スペシャル…後に教科書にグラハム・マニューバとして載ることになる」

「すごーい！」

「…」

と言う訳である、グラハムは寝ているヴィヴィオの頭を撫でると

「…まさしく、天使だ…」

と呟いた、そこへ足音が近づいてくる

「あゝ！やっぱりここにいた！」

「グラハム！手をだしてへんやろうな！」

「無論だ！手を出すわけがないだろう！」

「あつたりまえや、だよ…、でしょ、だろ…ですよ…え？手だしてないんですか？」

と散々な返事である

「やれやれ…これでは私は六課の鼻つまみ者だ…」

武士と姫（後書き）

今回はギャクに挑戦しました、いかがだったでしょうか？
グラハムはシリアスとコメディの両方が可能な人材です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4397/>

戦いの果てに辿り着いたのはリリカルな世界

2010年10月10日11時39分発行